

武庫川女子大学  
言語文化研究所年報

第 13 号

2001

# 武庫川女子大学

## 言語文化研究所年報

### 第 13 号

#### 目 次

- 言語文化研究所の活動の概要 1
- 新聞投書欄の片仮名表記 佐竹 秀雄 5  
-1999年の新聞3紙を資料として-
- キーワード 新聞 投書欄 片仮名表記 外来語
- 洋服を表す外来語の一特徴 岸本 千秋 19
- キーワード 外来語 使用普及時代 高頻度語 低頻度語 語彙調査
- 日韓男女のあいづちの対照研究 姜 昌妊 47
- キーワード あいづちの頻度 男女の差 感情の表出 共話
- テープ・レコーダーを利用する国語学習指導 市川 真文 63  
-メディアからみた国語教育史2-
- キーワード 実践研究 4 領域 利用場面 学習指導機能

## 言語文化研究所活動の概要

### 1. 2001年度の調査研究

#### (1) マスコミ報道の表現と表記に関する調査研究

この研究の目的は、マスコミ報道で使われていることばを調査することによって、日本語における問題点を探ることにある。マスコミで使われることばは、一面では一般の日本語の姿を映すと同時に、また、一般に対する影響力も大きい。マスコミにおける言語使用の実態を調査研究することによって、日本語の現状を考える基礎データを得ようとするものである。

今年度は、ファッションに関する雑誌を調査した。洋服を説明しているセンテンスをデータとし語彙調査を行い、ファッションを表現する場合にはどのようなことばが使われているかを分析をした。その結果については、LCりぼーと13号で「2001年オンナのファッション春を彩るキーワード」というタイトルで報告した。

### 2. 2001年度の刊行物等

#### (1) 言語文化研究所年報 第12号

前年度(2000年度)における研究成果の報告として、以下の論文を掲載して刊行した。

岸本千秋：インターネットの日記サイトにおける表記の特徴

西崎 亨：表現としての言文一致体

—速記演説文の文体規範と表現—

市川真文：メディア利用の原型

—メディアから見た国語教育史1—

姜 昌妊：韓国の流行歌の語彙

—1988・99年の流行歌を資料として—

徳原茂実：古今集仮名序の「ことわざ」について

(2) 研究レポート (LCりぼーと) 13号・14号

2001年度において、女性ファッション雑誌のデータをもとにしての語彙調査の結果と、「ことばと笑い」というテーマのもとに行ったアンケート調査の結果を報告した。各号のタイトルと内容は次の通り。

第13号：2001年オンナのファッション春を彩るキーワード

ファッションを表現する場合、どのようなことばが使われているのかについて調査した結果の報告。女性ファッション雑誌2誌(『JJ』『ミセス』)の洋服を説明しているセンテンスを調査材料として、そこ出現した語彙の調査を行った。報告の視点は次の2つ。1つは洋服を評価・形容している語についてであり、もう1つは色彩語についてである。

JJの評価語では、◎、×、♡など、記号を組み合わせてながら視覚に訴えて一目で分かるような表現を用いていること、色彩語ではキレイ色という抽象的な語が用いられていることが特徴であった。ミセスでは、上品さや優雅さ、また高級感を表す評価語が目立ち、用いられている語によって、講読年齢層の違いもうかがえた。2誌双方に共通する評価語としては、シンプル、カジュアル、女らしいなどがあり、色彩語では、白、黒、赤などがあげられた。

また、ファッションという性格上、外来語が多く出現するという結果も指摘した。

そのより詳しい報告が、本報告書の岸本千秋「洋服を表す外来語の一特徴」である。

第14号：ことばにまつわる笑い話

言い間違いや聞き間違い、あるいはことわざ・慣用句の意味の取り違いなど、日常生活の中で、ことばにかかわる笑い話の体験談を、LC倶楽部会員から募集し、その内容をまとめた報告である。

会員から寄せられた体験談を次の7項目に分類し、具体例をあげた。聞き慣れないことばや特殊なことば、ことわざ・慣用句、こどものことば、外国語・外国人、音が似ていることば、音の転倒、敬語。これ



らの他には、方言や若者ことばの意味が分からないことが解釈のくいちがいがいになるなどの笑い話が寄せられた。

### 3. 言語文化セミナーの開催

2001年11月28日（水）午後2時40分から、本学L1館の教室において、「落語の表現とユーモア」と題して、言語文化セミナーを開催した。

講師には、早稲田大学教授の野村雅昭先生を招いた。

講演は、落語のビデオを使い、その表現分析を通して、おかしきの仕組みを明らかにしようというユニークなもの。分析の対象は古今亭志ん朝が演じる『火焰太鼓』。志ん朝の話術に潜むユーモアを、話体のレトリックとして分析され、さらに、志ん朝とその父、志ん生との違いといった話も織り交ぜて話された。

参加者からは、「落語の表現を分析するおもしろさを知った」「ことばのもつ力について考えさせられた」などの感想が寄せられた。

参加者は、学外から50名近く、本学教職員・学生が約10名であった。

### 4. 科学研究費補助金による研究

2001年度「日常語化した専門語（新語）の語彙的構造の研究」（基盤研究〔C〕）というテーマで、科学研究費補助金を得た（03年度までの予定）。

この研究は、新聞の投書欄の語彙を対象として、一般の現代人が日常生活で必要としている語彙に、どのような専門語が流入しどのような語彙変化が見られるかを分析することを目的とするものである。

近年、さまざまな分野の専門語が日常生活に入りこむ「専門語の日常語化」現象が見られる。そこで、まず、多くの話題が取り上げられる新聞の投書欄の語彙調査を行い、高頻度語を中心にキーワードとなる語彙を求める。次に、それらの語彙について、専門語（新語）を選り分け、それらの語彙的な性格や構造（語種、語構造、意味領域）の分析を行う。

2001年度は、まず、語彙表を作成することをめざして、投書欄のデータ入力と修正を行った。

なお、研究メンバーは次のとおり。

研究代表者：佐竹 秀雄

研究協力者：岸本 千秋

## 5. 事務報告

### (1) 組織

所 長：佐竹 秀雄（文学部日本語日本文学科教授）

研究員：西崎 亨（文学部日本語日本文学科教授）

研究員：市川 真文（文学部日本語日本文学科教授）

研究員：加賀 元子（文学部日本語日本文学科助教授）

研究員：平岡 照明（文学部英語英文学科教授）

助 手：岸本 千秋（言語文化研究所非常勤助手）

### (2) その他

1998年9月に本学で行われたことわざ研究会によることわざフォーラムの運営に本研究所は協力した。それ以降、不定期ではあるが、関西ことわざ研究会を研究所で開いている。

## 新聞投書欄の片仮名表記

—1999年の新聞3紙を資料として—

佐 竹 秀 雄

### 1. 問題のありか

近年、日本語の中で外来語が加速度的な勢いで増加している。そのために、一般の人々、特に高齢者にとっては分かりにくい外来語が増えて、対処しきれないという問題が生じているとの指摘がなされている。ところで、外来語は、原則として片仮名で書かれる。もし外来語が急激に増加しているとすれば、書きことばにおいては、片仮名の比率が増加しているはずである。実際にそうなのであろうか。

一方、片仮名は外来語を表記する以外に、例えば、その語を文字列の中で目立たせるために使われる働きなどももっている。具体例を挙げるならば、「ゴミ」や「ガン」といった表記である。このような外来語以外の語を表記するときの片仮名の働きは、実際にはどのようなになっているのであろうか。

こうしたことがらについて、実情を知りたい。つまり、

- ・一般の人々の文章において、片仮名の比率は増えているのか。
- ・実際に片仮名表記される語とはどのような種類の語なのか。
- ・一般の人々が片仮名表記している外来語とは、具体的にどのような語であるのか。

について、その実態を明らかにしたいと考えた。

### 2. 調査対象と調査方法

そこで、一般の人々が書く文章を調査することとし、その代表として、新聞における投書欄の文章を調査対象に選んだ。朝日新聞には「声」、毎日新聞には「みんなの広場」、読売新聞には「気流」と、それぞれ読者の投書を掲載する投書欄が設けられている。この3紙の投書欄を対象にして、1999年

の1年、毎日5文ずつを無作為抽出し、そこに含まれる片仮名表記語を調べることにした。ただし、発行は各紙とも大阪本社のものである。

データのサンプリングは次のように行った。

まずパソコンで乱数を発生させ、二つの数字から成る一対の数値を求める。その二つの数を、それぞれ紙面におけるタテ位置とヨコ位置に割り当てる。タテ位置は紙面の段の数を、ヨコ位置は段における左からの距離を意味する。タテ位置である段については、新聞の各面の基本段数が15なので、その紙面で該当する15以下の数に限定した。ヨコ位置は、新聞の横幅が約380mmあるので、380以下の数を求めた。次に、その二つの値によって決められた一点を含む、もしくは最も近い行を選ぶ。そして、選んだ行の先頭にある文字を含む文を対象の文とする。この操作を、新聞朝刊が発行された各日に対して、5セットずつ行うことによって5文を抽出したのである。

その結果として、抽出した文の数は、各月1回の休刊日を除く353日、1日当たり3紙の計15文で、総数5,295文であった。

### 3. 結果

#### 3.1. 片仮名の比率

まず、片仮名の使われ方について、文字のレベルで調べてみよう。すべての文字のうち、片仮名はどれぐらいの比率を占めるのであろうか。

調査対象の5,295文に使われた文字の数は225,767字あった。それを文字種ごとに比率を調べた結果が、次の表である。

表1 字種別の度数とその比率

	漢 字	平仮名	片仮名	数 字	英 字	記 号	合 計
度 数	77,728	119,202	9,700	809	319	18,009	225,767
比率(%)	34.4	52.8	4.3	0.4	0.1	8.0	

片仮名の比率は4.3%で、この値は文章における数値としては決して高くない。文献1では、1979年7～8月に発行された種々の雑誌について、文章

のジャンルごとに字種の調査を行った。その調査でのジャンルとその片仮名比率は次の表2のようであった。表2では、片仮名比率のほかに、参考のために、漢字と平仮名の比率も示している。

表2 各種文章における片仮名の比率

(単位は%)

ジャンル	片仮名	漢字	平仮名
小説	4.44	24.78	60.72
評論・論文	6.13	31.99	53.80
実用・解説	13.75	23.39	53.91
ルポ・報告	7.34	31.41	51.27
インタビュー・座談会	4.69	22.89	62.10
随筆・エッセー	5.63	26.05	59.59
読者投稿	5.03	26.24	60.27
全体	6.95	26.52	57.29

新聞と雑誌とではその性格が異なるし、調査方法も違うので、単純に比較することはできないが、雑誌調査では片仮名比率は最も低い小説でも4.44%あるし、文章の性格が同じような読者投稿では5.03%ある。今回の新聞の投書欄の4.3%という数値と比べれば、片仮名の比率に関しては、新聞の投書欄のほうが雑誌よりも低いと言えよう。

他方、漢字の比率は今回の投書欄の値34.4%は雑誌のどの文章よりも高いし、それに対して、平仮名の比率52.8%は低いほうである。これらのデータから、新聞の投書欄の文章は、雑誌の各種文章と比べて、漢字が多い、比較的旧来の文章スタイルに近いものと考えられる。

したがって、外来語に関しては、近年外来語が流入しているからといっても、一般の人々の文章では、それほど片仮名が増えているわけではなさそうである。外来語は、一般の世界よりも限定された専門家の世界で、広がっていることが推測される。

### 3.2. 片仮名表記語の語種

次に、片仮名表記されたものを語を単位として集計した結果を見てみる。

片仮名で表記された語は、異なりで1,209語、延べで2,416語であった。なお、語の単位は国立国語研究所の新聞調査で採用された短単位に相当するものである。

語種別にカウントした結果、それぞれの語数は次のようになった。カッコ内の数値はパーセントである。

表3 片仮名表記語の語種別の度数

	異なり	延べ
外来語	883(73.2)	1,939(80.2)
漢語	33(2.7)	67(2.8)
和語	248(20.5)	358(14.8)
混種語	43(3.6)	52(2.2)
合計	1,207	2,416

これを見ると、外来語は、異なりで75%近くを占め、延べでは80%を越えている。片仮名表記語は圧倒的に外来語が多いことが確認できる。しかし、一方で、和語も異なりでは20%を越えていて、決して少なくない数を占めていることも認められる。

さらに、和語の異なりの比率が延べの比率を上回っていることは、特定の和語だけが片仮名で表記され、それが何度も使われるのではなく、和語のさまざまな語に片仮名が使われているという傾向を示している。これらの結果から、片仮名イコール外来語とは言えない状況にあると考えられる。少なくとも、片仮名と外来語とを短絡的に結びつける考え方は改めるべきであろう。例えば外来語に対して、「カタカナ語」というような語を安易に使うことは慎むべきではあるまいか。

### 3.3. 外来語以外の片仮名表記語

それでは、外来語以外の片仮名表記された語には具体的にどのようなもの

があるのだろうか。その実態を調べてみることにする。外来語以外の片仮名表記語は異なりで325語あったが、次の表4には、そのうちの度数2以上のものを掲げた。度数2以上の語は77語である。

表4 外来語以外の片仮名表記語（度数2以上）

順位	語	語種	注記	度 数 (比率パーミル)	順位	語	語種	注記	度 数 (比率パーミル)
6	カ月	K	助数詞	22(9.1)	213	イキリ	W	動物の名	2(0.8)
9	ゴミ	W		13(5.4)	213	ウサギ	W	動植物	2(0.8)
51	ヒナ	W	動植物	6(2.5)	213	ウソ	W		2(0.8)
51	メダカ	W	動植物	6(2.5)	213	エライ	W		2(0.8)
64	イライラ	W	オノマトベ	5(2.1)	213	エンドウ	K	動植物	2(0.8)
64	トキ	W	動植物	5(2.1)	213	オイ	W	感動詞	2(0.8)
82	カキ	W	動植物	4(1.7)	213	オバさん	W		2(0.8)
82	カブトムシ	W	動植物	4(1.7)	213	オモチャ	W		2(0.8)
82	カ所	K	助数詞	4(1.7)	213	カエル	W	動植物	2(0.8)
82	キノコ	W	動植物	4(1.7)	213	カッコイイ	M		2(0.8)
82	クリ	W	動植物	4(1.7)	213	カナブン	M	動植物	2(0.8)
82	ミカン	K	動植物	4(1.7)	213	カニ	W	動植物	2(0.8)
82	モノ	W		4(1.7)	213	カモ	W	動植物	2(0.8)
121	カタカナ	W		3(1.2)	213	キツネ	W	動植物	2(0.8)
121	カメ	W	動植物	3(1.2)	213	ギョウ	W	オノマトベ	2(0.8)
121	ガヤガヤ	W	オノマトベ	3(1.2)	213	キラキラ	W	オノマトベ	2(0.8)
121	カラス	W	動植物	3(1.2)	213	クワ	W	(鋏)	2(0.8)
121	キレる	W		3(1.2)	213	サギ	W	動植物	2(0.8)
121	ケガ	K		3(1.2)	213	サダコ	W	人名	2(0.8)
121	ジャガイモ	M	動植物	3(1.2)	213	シジュウカラ	M	動植物	2(0.8)
121	セミ	W	動植物	3(1.2)	213	スイスイ	W	オノマトベ	2(0.8)
121	チラリ	W	オノマトベ	3(1.2)	213	スズムシ	W	動植物	2(0.8)
121	ドキドキ	W	オノマトベ	3(1.2)	213	スズメ	W	動植物	2(0.8)
121	ニンジン	K	動植物	3(1.2)	213	ダイエー	W	企業名	2(0.8)
121	パチンコ	W		3(1.2)	213	タヌキ	W	動植物	2(0.8)
121	ヒト	W	動植物	3(1.2)	213	ダメ	M		2(0.8)
121	ボケ	W	(呆け)	3(1.2)	213	チッチ	W	オノマトベ	2(0.8)
121	ボロボロ	W	オノマトベ	3(1.2)	213	トンボ	W	動植物	2(0.8)
121	メジロ	W	動植物	3(1.2)	213	ネギ	W	動植物	2(0.8)
121	ワイワイ	W	オノマトベ	3(1.2)	213	ハシ	W	(箸)	2(0.8)
121	省エネ	M		3(1.2)	213	ハッ	W	副詞	2(0.8)
213	アユ	W	動植物	2(0.8)	213	ハッチョウトンボ	W	動植物	2(0.8)

順位	語	語種	注記	度 数 (比率パーミル)	順位	語	語種	注記	度 数 (比率パーミル)
213	ハト	W	動植物	2 (0.8)	213	ポリ袋	M		2 (0.8)
213	バンザイ	W		2 (0.8)	213	ボンボン	W	オノマトベ	2 (0.8)
213	ピカチュウ	W	主人公の名	2 (0.8)	213	マヒ	K	(麻痺)	2 (0.8)
213	ビワ	W	動植物	2 (0.8)	213	マンガ	K		2 (0.8)
213	フン	W	(糞)	2 (0.8)	213	モヤモヤ	W	オノマトベ	2 (0.8)
213	ボイ捨て	W		2 (0.8)	213	ワラ	W	動植物	2 (0.8)

表4で最も多かったのは「カ月」で、「1カ月」のように助数詞として使われたもので、22例(ヶ月:4例、カ月:1例を含む)と他を圧倒している。この「カ」は「箇」が片仮名書きされたもので、「カ所」(4例)の場合も同様の表記法である。これらは片仮名を使わずに、「〇箇月」や「〇か月」などと表記してもいいはずのものである。しかし、片仮名を使った混ぜ書き表記が一般的になっている。

2番めに多いのは「ゴミ」で、これも片仮名で書かなくてもよいものである。漢字で書くとすれば「芥」などと書くことになるが、この漢字は常用漢字表の表外字のため新聞では使われないし、一般的にも漢字表記は行われない。しかし、平仮名で書くことにすると、「ごみ」が全体の文字列の中に埋没する恐れが生じる。そこで、文字列の中で目立つようにと強調する意味で片仮名が使われ、現在ではその表記法がかなり一般化している。

3位以下では、一定の範囲の語に集中している傾向が見てとれる。「ヒナ(雛)」「メダカ」「トキ(鴝鴒)」「カキ(柿)」「カブトムシ」といった動植物に関する語や、「イライラ」「ガヤガヤ」「チラリ」「ドキドキ」などのオノマトベが目につく。これらの表記は、片仮名の一般的な表記法にのっとったものと言える。

以上のほか、度数4と3のものについて、以下で検討してみよう。

「モノ」は、「議員バッジがモノを言う」「モノがあふれる」などと使われていた。この使い方は「ゴミ」の場合と同様、強調の意味で使われていると考えられる。

「カタカナ」は、片仮名で書く理論的根拠はないが、視覚的なイメージと



して片仮名が使われるようである。

「キレル」は、普通の「切る」とは違った俗語、流行語であることを示すために片仮名表記されていると考えてよさそうである。

「ケガ」の場合、漢字表記「怪我」は当て字であり、「怪」を「け」と読ませるのは常用漢字の表外音でもある。そこで、新聞の表記としては漢字表記は望ましくないの、仮名書きになる。ただし、平仮名の「けが」は文字列に埋没しやすいので、片仮名にされやすい。やはり「ゴミ」と同じ表記法と言える。

「パチンコ」は語源的にもオノマトベと考えられ、元来、片仮名表記が一般的である。

「ボケ」は、「時差ボケ」の意味と、いわゆる高齢者の痴呆症に近い状態を指す意味とで使われていた。これも平仮名で書くと、目立たなくて読みにくいために片仮名にされると考えられる。

「省エネ」では、片仮名部分「エネ」は外来語エネルギーの省略形部分であり、これは外来語を片仮名表記していることになる。

以上、外来語以外で片仮名表記されるものについては、次のようにまとめられる。

- ・動植物に関する語やオノマトベなどが片仮名表記され、その結果、和語を中心に多種類の語が片仮名表記される。
- ・「ゴミ」「モノ」「ケガ」「ボケ」など、漢字で書きにくい事情にある語が、平仮名で書いて文字列の中に埋没するのを避けるために片仮名書きされる。
- ・「カ月」「カタカナ」など、習慣的に一般化した片仮名表記がある場合は、それに従って片仮名表記がなされる。
- ・「キレル」など、特殊な意味を表示する際に片仮名表記がなされる。

### 3.4. 片仮名表記の外来語

片仮名表記の中心をなす外来語の場合については、どのような語が使われているかという視点でながめてみることにする。

実際に使われた語は、本論の最後に「資料 度数順語彙表」として示して

いる。ただし、度数3以上の語に限った。それを見ると、固有名詞、特に、国名や地域名を表すものが数多く見られる。具体的には

アメリカ(29)・アジア(14)・ユーゴスラビア(12)・ドイツ(9)

フランス(9)・イギリス(7)・インド(7)・コンボ(6)・ユーゴ(6)

ローマ(6)・ロシア(6)・インドネシア(5)・クリントン(5)

などである。なお、単語の後のカッコ内の数字は度数である(以下、同様の形式で示す)。

上位の語に着目すると、メディアが関係する語が多いことも指摘できる。例えば、

テレビ(73)・ニュース(24)・マスコミ(11)・ラジオ(8)

などである。これらは、新聞の投書というものが、メディアからの情報に対する反応という性格をもっていることを示していると考えられる。特に、「テレビ」の出現度数の多さを考えると、テレビに対する反応がかなり強いと推測される。テレビがそれだけ一般の人々に大きな影響を与えていることを意味しているとも言えよう。

また、上位の語では、社会的な問題とかかわりの深い語が多いことも指摘できる。例えば、

ガイドライン(26)・ボランティア(23)・リストラ(17)

ダイオキシンの(11)・リサイクル(11)・エネルギー(10)・トンネル(10)

サマータイム(10)・ミサイル(9)

などである。

少し注釈を加えておこう。「ガイドライン」は、26例のうち25例までが当時議論されていた「日米防衛協力のための指針」の意味で使われていたもので、半数近くは「日米防衛協力のための指針(ガイドライン)」とカッコに入れる形式で使われていた。残りの1例は、「廃棄物処理に関するガイドラインを策定する必要がある」という使い方で、一般語としての「ガイドライン」の意味で使われていた。

「ダイオキシン」は、当時ゴミの焼却に伴ってダイオキシンが発生することが問題となり、投書でも多く取り上げられた。

「エネルギー」は、10例中8例が資源問題として扱われていて、精力、活力の意味で使われたものは2例であった。資源としてのエネルギー問題が社会的に関心と呼ぶ問題になってきたためであろう。

「トンネル」は山陽新幹線でトンネル内でコンクリートが剥落する事故が続いたことがあり、その話題が投書で扱われたときに使われた。

「サマータイム」は、エネルギー問題に絡んで夏時間（サマータイム）の復活が検討されることが話題になったため、投書で取り上げられた。

「ミサイル」は「ガイドライン」問題と関連して登場した語である。

このうち、「リストラ」「ダイオキシン」などは、それまであまり使われていなかった語である。その証拠に1990年ごろに刊行されている国語辞書には採録されていない。そうした新語が、社会的な問題とともに一般の人の文章に登場している点は注目に値する。

そのほかに多いものを、敢えて分類して挙げると、次のようになろう。

①メートル(11)・キロ(9)

②プロ(13)・スポーツ(12)・ファン(11)

③スーパー(13)・バス(13)・タクシー(12)・カード(12)・パソコン(10)

④サービス(13)・チェック(10)・ストレス(9)

①は助数詞として使われたもので、②はスポーツを中心とする語である。

③はモノを表す語で、④はコトガラを表す語である。

①は国名や地名と同じく言い換えようのないものであり、これらが多いことは当然のことであろう。

②のようにスポーツ関連のものが取り立てられたということは、一般の人々が共通して関心を持ち、かつ、外来語に縁のある世界がスポーツなのだというを示唆しているのではないか。もちろん、ファッションなどもスポーツ以上に外来語が多い世界と思われる。しかし、ファッションは老若男女を問わずとは言えないために、投書欄にファッション関連の語が多くは登場しなかったのだろう。その点で、スポーツはより多くの人々に関心と呼ぶものと考えられる。

③は日常生活に関係の深い語であるが、そこに、カードやパソコンが含ま

れていることは、やはり時代を反映していると言えよう。なお、「スーパー」は使用例13例のすべてが、スーパーマーケットの意味であった。

④で、「チェック」という語は、特に何かの事件に対してというのではなく、金融機関のチェックから、空港の手荷物検査のチェック、あるいは健康チェックなど、一般化した使い方がなされていた。また、「ストレス」が多く使われていたというのは、先の「パソコン」と同じく時代を反映するものと考えられる。

#### 4. おわりに

片仮名表記されている外来語に、特別に変わった語を見出すことはなかった。国名、地名、助数詞などのほか、当然のことながら日常生活にかかわりの深い語が見られた。しかし、その一方で、「リストラ」「ダイオキシン」といった語に代表されるように、社会的な問題にかかわりのある語が、一般の人々の文章にも当然使われていた。

本論の冒頭にも記したように、未熟な外来語を使用することが問題になっているが、一般の人々の文章には、そのような外来語は多くは登場しないのである。登場するとすれば、それは社会的な問題が生じて、それにかかわりのある語として登場するにすぎない。その場合、人々はその外来語の意味を十分に学習して使っていて、そこでは外来語使用上の問題は生じない。外来語使用上の弊害は、もっぱら行政側やメディアが中途半端な使い方をするために生じると思われる。少なくとも、新聞の投書レベルの文章では、未熟な外来語使用の問題は起こらないであろう。

#### 文献

- 1 佐竹秀雄「各種文章の字種比率」(国立国語研究所報告71『研究報告集(3)』、1982年)
- 2 石綿敏雄編『基本外来語辞典』(東京堂出版、1990年)
- 3 三省堂編修所編『官公庁のカタカナ語辞典 第2版』(三省堂、1998年)

## 資料 度数順語彙表

順位	語	語種	度数	パーミル	順位	語	語種	度数	パーミル
1	テレビ	G	73	30.2	33	ママ	G	8	3.3
2	アメリカ	G	29	12.0	33	メーカー	G	8	3.3
3	ガイドライン	G	26	10.8	33	ラジオ	G	8	3.3
4	ニュース	G	24	9.9	42	イギリス	G	7	2.9
5	ボランティア	G	23	9.5	42	イメージ	G	7	2.9
6	カ月	K	22	9.1	42	インド	G	7	2.9
7	リストラ	G	17	7.0	42	ゲーム	G	7	2.9
8	アジア	G	14	5.8	42	コンクリート	G	7	2.9
9	ゴミ	W	13	5.4	42	トイレ	G	7	2.9
9	サービス	G	13	5.4	42	ビデオ	G	7	2.9
9	スーパー	G	13	5.4	42	ホーム	G	7	2.9
9	バス	G	13	5.4	42	メロディー	G	7	2.9
9	プロ	G	13	5.4	51	コソボ	G	6	2.5
14	カード	G	12	5.0	51	ショック	G	6	2.5
14	スポーツ	G	12	5.0	51	スタート	G	6	2.5
14	タクシー	G	12	5.0	51	チーム	G	6	2.5
14	ユーゴスラビア	G	12	5.0	51	ドナー	G	6	2.5
18	ダイオキシ	G	11	4.6	51	ヒナ	W	6	2.5
18	ファン	G	11	4.6	51	プレゼント	G	6	2.5
18	マスコミ	G	11	4.6	51	ヘルパー	G	6	2.5
18	メートル	G	11	4.6	51	メダカ	W	6	2.5
18	リサイクル	G	11	4.6	51	ユーゴ	G	6	2.5
23	エネルギー	G	10	4.1	51	ルール	G	6	2.5
23	サマータイム	G	10	4.1	51	ローマ	G	6	2.5
23	チェック	G	10	4.1	51	ロシア	G	6	2.5
23	トンネル	G	10	4.1	64	アパート	G	5	2.1
23	パソコン	G	10	4.1	64	アルバイト	G	5	2.1
28	キロ	G	9	3.7	64	イライラ	W	5	2.1
28	ストレス	G	9	3.7	64	インドネシア	G	5	2.1
28	ドイツ	G	9	3.7	64	エール	G	5	2.1
28	フランス	G	9	3.7	64	クリントン	G	5	2.1
28	ミサイル	G	9	3.7	64	コンピューター	G	5	2.1
33	インフルエンザ	G	8	3.3	64	システム	G	5	2.1
33	オリンピック	G	8	3.3	64	スピード	G	5	2.1
33	クラス	G	8	3.3	64	テント	G	5	2.1
33	グループ	G	8	3.3	64	トキ	W	5	2.1
33	テスト	G	8	3.3	64	ドラマ	G	5	2.1
33	マナー	G	8	3.3	64	ネットワーク	G	5	2.1

順位	語	語種	度数	パーミル
64	ノート	G	5	2.1
64	ミス	G	5	2.1
64	リハビリ	G	5	2.1
64	レベル	G	5	2.1
64	ローン	G	5	2.1
82	イスラム	G	4	1.7
82	インタビュー	G	4	1.7
82	エスカレーター	G	4	1.7
82	カキ	W	4	1.7
82	カブトムシ	W	4	1.7
82	ガラス	G	4	1.7
82	カ所	K	4	1.7
82	キノコ	W	4	1.7
82	キムチ	G	4	1.7
82	キリスト	G	4	1.7
82	クリ	W	4	1.7
82	クリア	G	4	1.7
82	ゴールドウイーク	G	4	1.7
82	サラリーマン	G	4	1.7
82	スタッフ	G	4	1.7
82	スチロール	G	4	1.7
82	センター	G	4	1.7
82	センチ	G	4	1.7
82	チャンネル	G	4	1.7
82	ドナーカード	G	4	1.7
82	トマト	G	4	1.7
82	トルコ	G	4	1.7
82	パキスタン	G	4	1.7
82	バンク	G	4	1.7
82	ピアノ	G	4	1.7
82	プライド	G	4	1.7
82	ブライバシー	G	4	1.7
82	プラスチック	G	4	1.7
82	ヘアヌード	G	4	1.7
82	ペラランダ	G	4	1.7
82	ボーナス	G	4	1.7
82	ボール	G	4	1.7
82	マスク	G	4	1.7
82	ミカン	K	4	1.7

順位	語	語種	度数	パーミル
82	メッセージ	G	4	1.7
82	モノ	W	4	1.7
82	モラル	G	4	1.7
82	リュック	G	4	1.7
82	ルート	G	4	1.7
121	アイデンティティー	G	3	1.2
121	アップ	G	3	1.2
121	アドバイス	G	3	1.2
121	イタリア	G	3	1.2
121	イラン	G	3	1.2
121	インターネット	G	3	1.2
121	インターハイ	G	3	1.2
121	エスカレート	G	3	1.2
121	エッセー	G	3	1.2
121	エピソード	G	3	1.2
121	オルガン	G	3	1.2
121	ガーデニング	G	3	1.2
121	カタカナ	W	3	1.2
121	カメ	W	3	1.2
121	カメラ	G	3	1.2
121	ガヤガヤ	W	3	1.2
121	カラス	W	3	1.2
121	キレる	W	3	1.2
121	クラブ	G	3	1.2
121	グラム	G	3	1.2
121	クリスマス	G	3	1.2
121	グレー	G	3	1.2
121	クローン	G	3	1.2
121	ケース	G	3	1.2
121	ケガ	K	3	1.2
121	コース	G	3	1.2
121	コーヒーマ	G	3	1.2
121	コピー	G	3	1.2
121	コマーシャル	G	3	1.2
121	コンサート	G	3	1.2
121	サイズ	G	3	1.2
121	サッチャー	G	3	1.2
121	シーザー	G	3	1.2
121	シーズン	G	3	1.2

## 新聞投書欄の片仮名表記

順位	語	語種	度数	パーミル	順位	語	語種	度数	パーミル
121	シート	G	3	1.2	121	ヒト	W	3	1.2
121	シーン	G	3	1.2	121	ビニール	G	3	1.2
121	ジャガイモ	M	3	1.2	121	ファクス	G	3	1.2
121	ショートステイ	G	3	1.2	121	ブラジル	G	3	1.2
121	シンプル	G	3	1.2	121	ページ	G	3	1.2
121	スハルト	G	3	1.2	121	ペースメーカー	G	3	1.2
121	スペイン	G	3	1.2	121	ベッド	G	3	1.2
121	セーター	G	3	1.2	121	ペット	G	3	1.2
121	セミ	W	3	1.2	121	ペットボトル	G	3	1.2
121	ダメージ	G	3	1.2	121	ベビーカー	G	3	1.2
121	タレント	G	3	1.2	121	ポイント	G	3	1.2
121	チャイルドシート	G	3	1.2	121	ボケ	W	3	1.2
121	チャレンジ	G	3	1.2	121	ポスター	G	3	1.2
121	チャンス	G	3	1.2	121	ボタン	G	3	1.2
121	チラリ	W	3	1.2	121	ボロボロ	W	3	1.2
121	デイサービス	G	3	1.2	121	マニュアル	G	3	1.2
121	デー	G	3	1.2	121	マラソン	G	3	1.2
121	デパート	G	3	1.2	121	メジロ	W	3	1.2
121	ドア	G	3	1.2	121	メダル	G	3	1.2
121	ドキドキ	W	3	1.2	121	メモ	G	3	1.2
121	トラブル	G	3	1.2	121	ラーメン	G	3	1.2
121	ニンジン	K	3	1.2	121	ランナー	G	3	1.2
121	ノック	G	3	1.2	121	リーグ	G	3	1.2
121	パチンコ	W	3	1.2	121	リーダー	G	3	1.2
121	パパ	G	3	1.2	121	リズム	G	3	1.2
121	パブル	G	3	1.2	121	ルビ	G	3	1.2
121	バランス	G	3	1.2	121	ルミナリエ	G	3	1.2
121	ハローワーク	G	3	1.2	121	ワイワイ	W	3	1.2
121	パンフレット	G	3	1.2	121	省エネ	M	3	1.2

## 洋服を表す外来語の一特徴

岸 本 千 秋

### 0. はじめに

19世紀半ば、開国後に西洋から流入した近代西洋服装を、和服に対して洋服と言うようになった。時代を経て現代では、洋服は完全に日本の服装となっている。ことばの面でも、「シャツ」「スカート」「ジャケット」など洋服の種類を表す語や、「シンブル」「エレガンス」など、洋服や着ている人を評価する語についても、日本語化した外来語が多く活躍している。

日常生活の中で、これら洋服に関係する外来語を最もよく目にするのは、ファッション雑誌を手にとった時であろうし、そこでは、当然外来語が多く使用されていると予測される。

国立国語研究所が行った雑誌九十種の用語調査でも、服飾などの記事を多く含む婦人雑誌に、外来語が最も多く出現するという分析結果が示されており、洋服やファッションを表現する際に外来語は必要不可欠なものと言える。

そこで、ここではファッション雑誌の中で、洋服を紹介している記事に注目し、そこで使用されていることばの語彙調査を行う。そして、得られたデータを元に、女性ファッション雑誌の中での外来語の使用状況を明らかにすることを小稿の目的とする。

### 1. 調査の方法

調査材料として用いた雑誌は、女性向け月刊ファッション雑誌、『ミセス』と『JJ』で、それぞれの2001年4月号と同10月号を対象とした。『ミセス』は、35歳以上の女性読者を対象とした雑誌であり、ファッションを始め、化粧品や料理、インテリアなどを扱った構成になっている。『JJ』は女子高校生・女子大学生からOLを対象とした雑誌であり、こちらもファッションや化粧品を紹介している記事が主に掲載されている。両雑誌とも、「発行部数



が多いもの」を基準に選んだ。

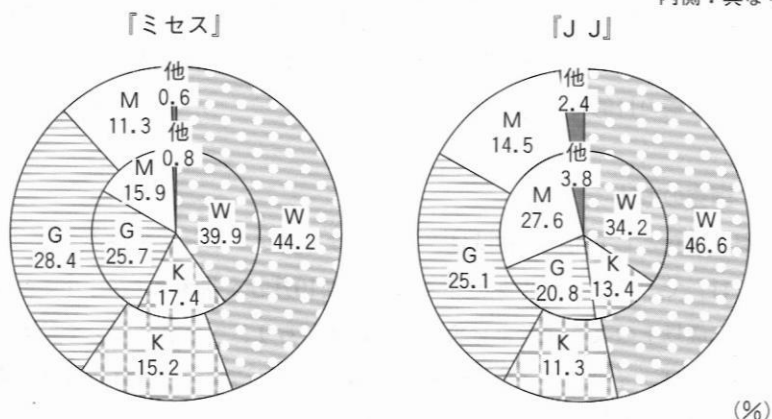
この2種の雑誌から、洋服に関する記事（以下、洋服紹介記事）が掲載されている部分をデータと認定した。ただし、洋服紹介記事の中には、①全体のタイトル、②洋服の説明を文章として表しているもの、③写真のキャプション（商品名・価格・ブランド名だけが列挙されたもの）があり、特に③は単語・数字の羅列をしているに過ぎないものである。そこで、今回の調査対象としたのは、その内、洋服について、センテンスの形で何らかの説明を加えていると認められる①と②についてである。これらのデータを、国立国語研究所による長単位と呼ばれる言語データに区切り、語彙調査を行った。長単位を採用した理由は、ファッション雑誌の中で用いられる外来語の一特徴を、語の意味の面からもある程度把握するためである。たとえば、「ミニスカート」は、短単位に区切ると「ミニ／スカート」と2語に分割されるが、それでは「ミニスカート」1語としての意味や用いられ方の特徴が見えなくなってしまう。そういったことを避けるため、今回の調査では長単位を採用した。

## 2. 結果

### 2.1 語種別使用率

図1 語種別使用率

外側：延べ  
内側：異なり



両雑誌それぞれの語種別使用率をまず図1に示す。語種は、和語 (W)

漢語 (K) 外来語 (G) 混種語 (M) その他 (他) の5つに分類し、その他はアラビア数字と固有名詞とした。固有名詞には、日本人の名前を入れたブランド名を含めるが、外国のブランド名は外来語と認定し、それに含めない。たとえば「Junko Shimada」は、日本人名を使ったブランド名なので固有名詞としてその他に分類し、「ダックス」「バーバリー」などは外国のブランド名なので外来語とするのである。

語種別使用率で特徴的なのは、次の2点である。1つは和語・外来語が多く漢語が少ないこと、1つは混種語が多いことである。混種語が多い理由としては、語の区切り方を長単位としたことが影響していると考えられる。

外来語が高い比率を占めていることは、先に予測した通りの結果であった。和語も高い比率で現れているが、ここでは、初めに述べたように、外来語に焦点を当て、その使われ方を見ていくことにする。

図1を見ると、語種全体の中で外来語が占める割合は、JJの異なりで約20%、JJの延べ、ミセスの異なり・延べでも、それぞれ25%以上となっていて、その多さは、当研究所が行った他の語彙調査の資料と比較しても明らかである。

このように、外来語の割合が高くなっているのは、上にも述べたように、洋服を表す語という性格上、当然であると考えられる。では、具体的にはどのような外来語が使用されているのだろうか。次に、出現した個々の外来語に注目して、分析を行う。

## 2.2 外来語の語彙表

まず、出現した外来語のみを抜き出し、次々ページ以下に語彙表として、表1、表2に示す。表1は『ミセス』、表2は『JJ』である。表にあげる語は、紙面の都合上、延べ0.3%までとし、そのパーセントの比率は、外来語のみの総度数を100とした時の数値である。ミセスでは、ジャケット、デザイン、スカート、パンツ、シンプルなどが上位に並んでいる。JJでは、ワンピース、ニット、パンツ、スカート、ジャケットなどの頻度が高く、両雑誌とも、やはり、洋服そのものの種別を示す語が、高い頻度で数多く出現していることが分かる。

JJに特徴的なのは、「ワンピース」「カーデ」などの省略形が使用されていることと、「シンプルズ」のような造語が登場することである。省略形は、テンポの良さを感じさせ、造語は、JJの読者だけに分かる、いわゆる仲間うちのことばとして使用しているのではないだろうか。一方のミセスには、このような省略形も造語も登場しないので、これらは若い女性読者のウケを狙ったものであろう。また、JJでは「ミニスカート」の度数が31あるのに対して、ミセスでは1回しか現れない、というふうに、読者年齢層の違いをうかがい知ることができる。

次に、両雑誌に共通して現れる語を取り出すことにする。共通する語は次の34語であり、ミセス、JJともに、表1、表2に示した語全体の約4割にあたる。

ジャケット デザイン スカート パンツ シンプル シルエット  
エレガント ニット ライン アクセント スタイル アイテム  
カジュアル ウエスト コーディネート ボタン ワンピース  
ブランド コート トレンド ベルト アンサンブル イメージ  
インナー シャツ ポイント ボーダー コーデュロイ ストレッチ  
チェック デテールバランス ページュ リボン

(『ミセス』の度数順)

両雑誌は、前述のように、対象とする読者年齢層が違い、紹介しているブランドや記事の書き方がずいぶんと違うが、そこで使用されている外来語には、共通する語が少なからずあることが分かる。

つまり、これら両雑誌に共通する34語は、洋服を表現する際の、基本的な役割を担っている外来語の一部であるのではないかと推測できるのである。

また、これら34語を見てみると、洋服に直接関係がある語とそうでない語があることに気が付く。下線を付しているのは、洋服の種別や装飾、素材を表している語であり12語ある。これらは、洋服に直接関係がある外来語であり、言うならばファッション的な外来語だと言える。残りの22語は洋服とは直接に関係していない、ファッション以外の他の分野でも用いられることがある外来語である。つまり、洋服紹介記事には、洋服を表現するファッショ

表1『ミセス』85語

順位	語	度数	%
1	ジャケット	41	2.9
2	デザイン	31	2.2
3	スカート	29	2.1
4	パンツ	26	1.9
4	シンプル	26	1.9
6	シルエット	24	1.7
6	ブラウス	24	1.7
8	エレガント	23	1.6
9	ウール	20	1.4
10	シルク	19	1.4
10	ニット	19	1.4
10	ライン	19	1.4
13	アクセント	18	1.3
14	スタイル	17	1.2
15	スーツ	16	1.1
15	フォルム	16	1.1
17	ニュアンス	13	0.9
18	アイテム	12	0.9
18	カジュアル	12	0.9
18	ミセス	12	0.9
21	ウエスト	11	0.8
21	コットン	11	0.8
23	コーディネート	10	0.7
23	シャープ	10	0.7
23	ボタン	10	0.7
23	レザー	10	0.7
23	ワンピース	10	0.7
28	Tシャツ	9	0.6
28	ブランド	9	0.6
28	ヴァイエラ	9	0.6
31	コート	8	0.6
31	セーター	8	0.6
31	ツイード	8	0.6
31	トレンド	8	0.6
31	パンツスーツ	8	0.6

表2『JJ』78語

順位	語	度数	%
1	ワンピース(ワンピ)	135	3.1
2	ニット	107	2.4
3	パンツ	103	2.4
4	スカート	93	2.1
5	ジャケット	91	2.1
6	デニム	87	2.0
7	ライン	84	1.9
8	コーディネート	79	1.8
9	スタイル	69	1.6
10	ポイント	57	1.3
11	シンプル	50	1.1
11	ピンク	50	1.1
13	カジュアル	49	1.1
14	シャツ	48	1.1
15	アイテム	47	1.1
16	シルエット	45	1.0
16	デザイン	45	1.0
16	トップス	45	1.0
19	ページュ	39	0.9
20	チェック	35	0.8
21	カーデ	34	0.8
22	ウエスト	32	0.7
22	ディテール	32	0.7
24	ミニスカート	31	0.7
25	セクシー	30	0.7
26	センタープレス	27	0.6
26	タイト	27	0.6
28	イメージ	26	0.6
28	インナー	26	0.6
30	コーデュロイ	24	0.5
31	ストレッチ	21	0.5
32	アンサンブル	20	0.5
32	カーキ	20	0.5
32	プラス	20	0.5
35	クイーンズコート	19	0.4

表1『ミセス』85語

順位	語	度数	%
31	ボトム	8	0.6
37	エレガンス	7	0.5
37	カーディガン	7	0.5
37	ベーシック	7	0.5
37	ベルト	7	0.5
37	クラシック(クラシック)	7	0.5
42	アンサンブル	6	0.4
42	イメージ	6	0.4
42	インナー	6	0.4
42	カッティング	6	0.4
42	シャツ	6	0.4
42	フリル	6	0.4
42	ポイント	6	0.4
42	マニッシュ	6	0.4
42	メンズライク	6	0.4
42	フィット	6	0.4
42	ボーダー	6	0.4
53	コーデュロイ	5	0.4
53	シーン	5	0.4
53	セットアップ	5	0.4
53	トリミング	5	0.4
53	ドレープ	5	0.4
53	バリエーション	5	0.4
53	パリ	5	0.4
53	フェミニン	5	0.4
53	モダン	5	0.4
62	ギャザー	4	0.3
62	コレクション	4	0.3
62	サイズ	4	0.3
62	シルクサテン	4	0.3
62	ストライプ	4	0.3
62	ストレッチ	4	0.3
62	ストレンヂパンツ	4	0.3
62	タイトスカート	4	0.3
62	ダックス	4	0.3

表2『JJ』78語

順位	語	度数	%
36	Vネック	18	0.4
36	ゴージャス	18	0.4
36	タイプ	18	0.4
36	ボタン	18	0.4
40	blondy	17	0.4
40	デート	17	0.4
40	トレンド	17	0.4
40	ブラックデニム	17	0.4
40	モノトーン	17	0.4
40	リボン	17	0.4
47	シンプルズ	16	0.4
47	セレクト	16	0.4
47	バランス	16	0.4
50	アクセント	15	0.3
50	ゴールド	15	0.3
50	デートスタイル	15	0.3
50	ノースリーブ	15	0.3
50	ヒップハング	15	0.3
50	ミニ	15	0.3
56	チョイス	14	0.3
56	ワイドパンツ	14	0.3
58	D&G	13	0.3
58	Iライン	13	0.3
58	バック	13	0.3
58	ブルー	13	0.3
58	ボーダー	13	0.3
63	インタープラネント	12	0.3
63	エレガント	12	0.3
63	ブランド	12	0.3
63	ベルト	12	0.3
63	ミュール	12	0.3
68	カットソー	11	0.3
68	カラー	11	0.3
68	コート	11	0.3
68	ジル	11	0.3

表1『ミセス』85語

順位	語	度数	%
62	チェック	4	0.3
62	ディテール	4	0.3
62	トップ	4	0.3
62	ハウスチンク	4	0.3
62	バッグ	4	0.3
62	バランス	4	0.3
62	パンツスタイル	4	0.3
62	フランス	4	0.3
62	プレーン	4	0.3
62	ページュ	4	0.3
62	リボン	4	0.3
62	ロゴ	4	0.3
62	ロングジンセント	4	0.3
62	ロングスカート	4	0.3
62	スポーティ	4	0.3

表2『JJ』78語

順位	語	度数	%
68	タートル	11	0.3
68	ツインニット	11	0.3
68	ブーツ	11	0.3
68	ブーツカット	11	0.3
68	ブルゾン	11	0.3
68	ポケット	11	0.3
68	ラインストーン	11	0.3

的な外来語ばかりではなく、ファッションとは直接に関係しない外来語も数多く用いられており、ファッション的な外来語と同じように、ファッションを表現する上で、重要な働きをしていると言える。

### 2.3 外来語の時代別比率

2.2では、外来語が語種全体の中で占める割合の高さに注目し、高頻度の外来語には、各雑誌に特徴的な語と、共通する語があることを示し、そして、それはファッション的な語ばかりではなく、ファッション的でない語も用いられていることを述べた。さらに、その共通する外来語は、洋服を表現する際の基本的な役割を持つ語と言えるのではないかという推測を立てた。

さて、ここで、「外来語」の定義を改めて確認してみよう。「外来語」とは、『国語学大辞典』によれば、

他国の言語体系の資料（語・句・文字等）を自国語体系に借り入れて、その使用が社会的に承認されたもの

と定義されている（執筆者：樺垣実）。社会的に承認されて初めて、外来語という定義がなされるのである。「社会的に承認される」とは、他国の言語体系の資料が具体的にどのような状況になった場合を指し示すのかが、この記述だけではいまひとつ明確に分からないが、ここでは「世間一般にその語が普及し、使用され、語の意味が通じること」という解釈をすることとする。

では、ファッション雑誌の洋服紹介記事に使用されている外来語の、語や語義が、社会的に承認され普及したのはいつの時代であろうか。

冒頭で述べたように、洋服が日本に入ってきたのは開国後である。それ以降、現在に至るまで、洋服に関係する語も多数取り入れられてきており、それら洋服に関わる外来語が、いつの時代に日本に取り入れられたものなのか、「時代別」という観点から外来語を眺めてみる。そして、そこに何らかの特徴なり傾向なりが促えられるのか、考えてみようというのである。

そこで、試みとして、出現した外来語1語ごとに、それらが社会に普及した時代を認定することにする。そして、その時代認定をしたデータを元に、以下順に述べる3段階の作業を行う。それらの作業から得られた結果によって、取り入れられた時代の別により、外来語の現れ方に違いがあるのかどうか、あるとすればどのような違いなのか、そして、その違いは外来語の持つ性質の特徴とどのようにかかわっているのか、また、何を意味しているのかについて検討したい。

語ごとの時代認定の基準は、『基本外来語辞典』（石綿敏雄編東京堂出版（1990））に記載されている時代とした。同辞典では「使用普及時代」として、「その語またはその語義が社会的にある程度普及したと推定される時代」が示されている。たとえば「ジャケット」という語が社会に普及したとされるのは大正時代、「デザイン」という語が社会に普及したとされるのは明治時代とされており、ここではその記述に従って1語ごとの時代認定を行った。ただし、抽出した外来語の中には、辞典の見出し語にないものもある。「バギー」「コサージュ」などがそうであり、これらの語は、極めて最近に取り入れられたことが明らかであり、そのため辞典に載っていないと考えられる。従って、そのような語については時代を現代と認定することにした。

このように筆者が時代認定を現代とした語は、ミセス・JJともに、延べで3.9%である。

しかし、このように、特定の語について、筆者が時代を現代と認定することについては、問題点が1つある。それは、それらの語が、「外来語」の定義に正しく当てはまるかがまだ分からない、という点である。繰り返しになるが、他国の語は、「その使用が社会に承認されないと「外来語」とは定義されない。「バギー」「コサージュ」などの語が、将来、社会的に「外来語」として承認されるかどうか、それについての判断は、筆者はできない。

今、この段階では、少なくとも「発行部数が比較的多い女性ファッション雑誌」の中で「現実には用いられていること」を理由に、時代を現代と認定するほかはない。

また、複合語として辞典に掲載されていない語もある。それらの複合語については、複合語を構成しているそれぞれの語について時代認定をし、新しい時代の方を採用することとした。たとえば「スーツスタイル」は見出し語にないが、その造語成分である「スーツ」と「スタイル」は掲載されており、それらが取り入れられた時代は、それぞれ戦前昭和時代、明治時代とされている。つまり、明治時代には「スタイル」という外来語しか取り入れられておらず、少なくとも「スーツスタイル」という複合語は存在し得なかった。時代が下り、戦前昭和になって「スーツ」という語が取り入れられて初めて、「スーツ」と「スタイル」が結合する可能性が出てきたのである。従って、「スーツスタイル」という複合語は戦前昭和以降に形成されたと考え、より新しい時代の戦前昭和を採用するのである。(*「スーツ」と「スタイル」の結合が戦前昭和であるという根拠は、今のところ筆者には示すことができないのだが、複合語の時代認定という作業の上で、便宜的に、新しく取り入れられた語の時代をその複合語の時代とするのが、ベターな方法であると考えた。*)

なお、この時代を特定する作業では、混種語に含まれる外来語もデータに加えることとし、ブランド名・人名・国名はデータから省いた。

時代の別は、明治、大正、戦前昭和、現代（戦後昭和と平成）の4時代で



ある。

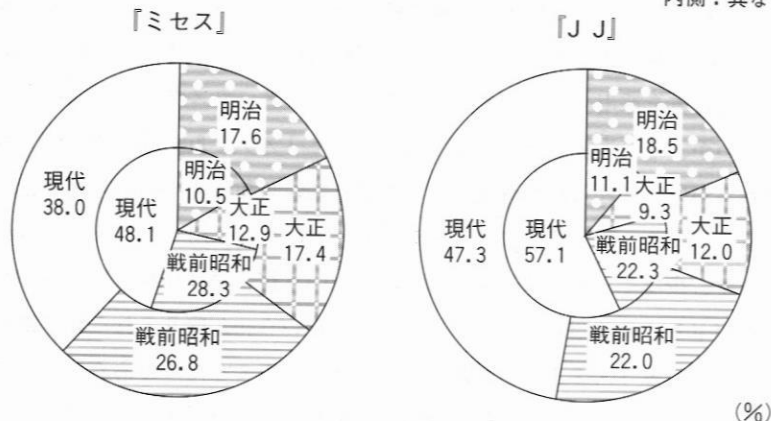
以下、外来語が取り入れられた時代の別を考察の軸として、ファッション雑誌の洋服紹介記事中で使用される外来語の一特徴を浮かび上がらせることを試みる。

### 2.3.1 時代別比率 第1段階

語の時代認定で得られたデータをもとに、外来語の時代別比率をグラフに表したのが第1段階の作業である(図2)。ただし、図に表した4つの時代以外に、江戸時代に取り入れられた語として「サテン」「リネン」「ゴム」などの数語が出現したが、図が煩雑になることを避けるため、グラフには反映させていない。

図2 外来語の時代別比率

外側：延べ  
内側：異なり



集計の結果、まず目に付くのは、両雑誌とも現代の比率が最も高く、次いで戦前昭和時代が続いていることである。比較的最近取り入れられた外来語が、ファッション雑誌では、多く用いられていることが分かる。

一方、古い時代の明治と大正に視点を移すと、その割合の合計は、ミセス・JJとも、異なりでは約20%であるが、延べでは約30~35%と約3分の1を占めていることが読み取れる。そして、当然だがそれに比例して、現代と戦前昭和の延べの割合が低くなっていることに気が付く。つまり、明治、大正時

代に普及した外来語は、現代・戦前昭和に比べて語の種類は少ないが、何度も繰り返し使用される高頻度語が多く出現していることを示している。この結果を元に、1つの推測を立てることができる。

それは、古い時代に取り入れられたそれらの外来語は、洋服を表現する際に重要であり基本的な語ではないだろうかということである。そこで次に度数段階別のグラフに表し、さらに詳しく見てみよう。

### 2.3.2 時代別比率 第2段階 度数段階別

第2段階として、異なり語数の出現度数を4段階に分けて、度数段階別に時代比率を表したグラフを次ページの図3に示す。図3は、図2で見た内容に、具体的な度数の項目を加え、段階別に示したものである。

図3では、ミセス・JJともに、明治時代は、出現度数が高くなるほど比率が増えていることが注目され、図2で見た内容が、よりはっきりとグラフに表れていることが分かる。例えばミセスでは、頻度1～2の低頻度語の比率は8.4%であり全体の1割にも満たない。しかし、頻度10以上では25%にのぼり、その比率は現代と同じになっているのである。

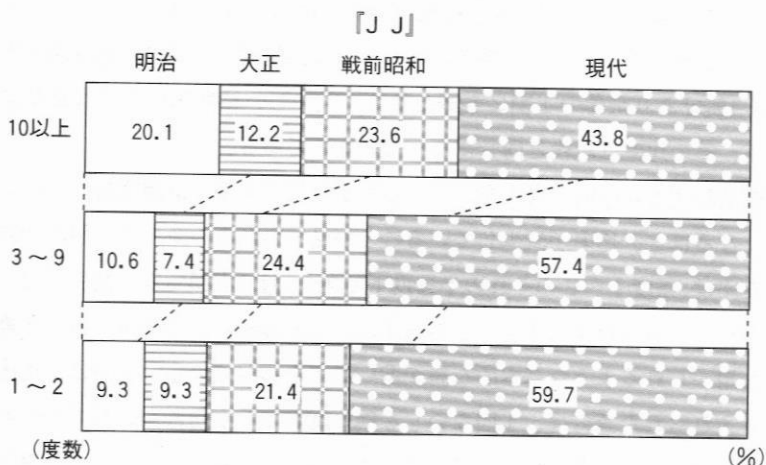
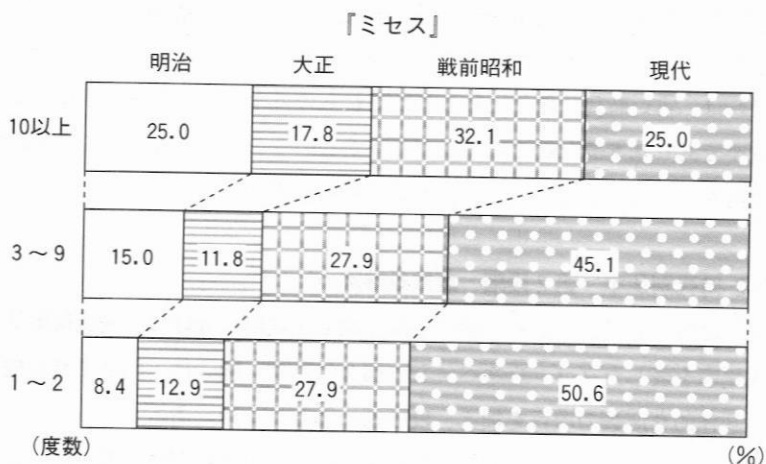
明治時代と対照的な構成をしているのが現代である。出現度数のレベルが高くなるほど、比率が減少していることが見てとれる。ミセスの頻度10以上の比率は、頻度1～2のその半分以下であり、JJでも15%以上減少している。

つまり、明治時代に普及した外来語は、語の種類は少ないが、何度も繰り返し用いられるような基本的な語が多いことを示している。反対に、現代に取り入れられた語には、1回ないし2回の度数でしか現れない語の方が多く、語の種類がバラエティに富んでいることを表している。ファッション雑誌の洋服紹介記事の中では、取り入れられた時代によって外来語の働きに違いがあり、おおまかな住み分けができていようである。

これらの結果を、先の現代雑誌九十種の用語調査にある、語種別使用率と品詞別使用率についての分析結果と比較してみると、次のようなことが言えるだろう。

分析結果の解説については、『図説日本語 グラフで見ることばの姿』に、

図3 度数段階別の時代別比率（異なり）



コンパクトな解説が記されているので、その解説を参考にしたい。

同書の解説では、語種別使用率について、「和語は漢語に比べて単語の種類は少ないが、基本的な、よく使われる語が多い」と述べられており、また、品詞別使用率については、「動詞は異なり語数で1割しかないが、述べ語数では2割を占めている」ことを指摘している。

この内容を、以上の図2、図3で明らかにしてきた事柄と照らし合わせて

みると、次のようなことに気が付く。それは、明治時代に取り入れられた外来語の特徴は、現代雑誌九十種の用語調査の語種別分布では和語に、また品詞別分布では動詞に類似した分布図を形成しているということである。

つまり、明治時代に取り入れられた外来語と、日本語全体の中で、中心的・基本的役割を担っている和語とは、もちろん、一方は外来語の中での位置付けであり、他方は、語種全体の中での位置付けであるという違いはあるにせよ、その量的・質的な働きは、同じであることを示している。そして、それはすなわち、外来語全体の中で中心部分をなし、基本的で重要な働きをしているのが、明治時代に取り入れられた外来語であることを意味していると言える。

### 2.3.3 時代別比率 第3段階

次に、第3段階では、どのような語が、どの時代に取り入れられたのか、4つの時代それぞれの上位に出現した具体的な語をあげて、語彙表として以下に示す(表3～表6)。各語の時代の別は、その外来語ごとに、『基本外来語辞典』を引けば明らかな事柄で、改めてここに示すまでもないのだが、しかし、ファッション雑誌に現れる外来語の一側面を知る1つの手がかりとして、度数をカウントして、出現度数順に具体的な語を示すことに意味があると考ええる。

表中の語頭に●印を付しているのは、洋服の種別・装飾・素材を表しているいわゆるファッション的な語である。

表3 明治時代に取り入れられた外来語

ミセス 27語 ●=10語			JJ 29語 ●=7語		
順位	語	度数	順位	語	度数
2	デザイン	35	5	スタイル	138
4	シンプル	26	7	ライン	103
9	●シルク	23	12	●シャツ	72
12	ライン	19	16	ポイント	59
14	スタイル	17	17	シンプル	55
18	●コットン	14	21	デザイン	48
24	●ボタン	10	24	プラス	46
31	●コート	8	27	リボン	42
37	イメージ	7	32	●ボタン	32
37	エレガンス	7	34	イメージ	29
37	クラシック	7	39	V	25
45	●シャツ	6	43	バランス	24
45	ポイント	6	45	カーキ	23
59	ストライプ	5	46	バック	21
59	●ファッション	5	60	ゴールド	16
70	バランス	4	60	●ポケット	16
70	リボン	4	79	カバー	13
94	●カシミア	3	82	イエロー	12
94	コントラスト	3	82	ハート	12
94	●ポケット	3	89	●コート	11
94	マーク	3	104	ショップ	10
122	V	2	128	●レース	8
122	●カフス	2	143	●カシミア	7
122	●グログラン	2	143	ストライプ	7
122	ゴールド	2	156	エレガンス	6
122	スタンダード	2	156	コンパ(コン)	6
122	プラス	2	156	パープル	6
			182	●イン	5
			182	●ファッション	5

明治時代に取り入れられた語には、基本的なものが多いと述べてきたが、表3に示した上位5語の内、ファッション的な外来語は、ミセスでは「シルク」、JJが「シャツ」と、各1語のみである。「デザイン」「シンプル」「スタイル」「ライン」など、ファッション雑誌の中で、基本的な役割を持つと言

える外来語は、ファッションに直接関係しない、他分野でも使われる語が多く用いられているようだ。

表4 大正時代に取り入れられた外来語

ミセス 23語 ●=7語			JJ 23 ●=5語		
順位	語	度数	順位	語	度数
1	●ジャケット	43	4	●スカート	146
3	●スカート	29	8	●ジャケット	102
6	●ウール	24	17	ピンク	55
6	●ブラウス	24	21	シーズン	48
15	ミセス	16	32	●ベルト	32
31	●セーター	8	46	セレクト	21
31	●ベルト	8	79	グレー	13
45	プリント	6	82	アップ	12
59	コレクション	5	89	オリジナル	11
59	シーン	5	89	スリット	11
70	●トップ	4	89	●ベスト	11
70	バッグ	4	104	クラシカル	10
70	パール	4	104	パール	10
70	ミックス	4	116	カット	9
94	ソフト	3	116	グリーン	9
122	インポートシリーズ	2	128	アピール (アピ)	8
122	エッセンス	2	128	オレンジ	8
122	オレンジ	2	182	●ウール	5
122	ショート	2	182	ダーク	5
122	テスト	2	182	ミックス	5
122	ナチュラル	2	206	ショルダー	4
122	●ベスト	2	239	リッチ	3
122	ロング	2	239	ワイルド	3

大正時代になると、上位5語の内、ファッション的な外来語は、ミセスで4語、JJで3語登場し、明治時代と対照的である。両雑誌とも1位2位を占めている「ジャケット」「スカート」などは、洋服を表す語として、まさしく基本的な語だと言えよう。

表5 戦前昭和時代に取り入れられた外来語

ミセス 26語 ●=9語			JJ 26語 ●=8語		
順位	語	度数	順位	語	度数
6	シルエット	24	1	●ワンピース (ワンピ)	181
9	エレガント	23	15	●カーデンガン (カーデ)	64
13	アクセント	18	20	チェック	50
15	●スーツ	16	23	シルエット	47
18	ニュアンス	14	27	ページュ	42
22	ウエスト	12	30	ウエスト	35
24	シャープ	10	31	ディテール	33
24	●レザー	10	38	●インナー	26
24	●ワンピース	10	39	●ノースリーブ (ノース リ)	25
37	●カーディガン	7	46	タイプ	21
37	サイズ	7	49	ボーダー	20
45	●インナー	6	52	カラー	18
45	カッティング	6	52	●ファー	18
45	チェック	6	60	アクセント	16
45	ボーダー	6	60	チョイス	16
45	モダン	6	65	エレガント	15
45	●レーヨン	6	65	ボリューム	15
59	バリエーション	5	65	●ラメ	15
70	●キャミソール	4	65	●レザー	15
70	●ギャザー	4	75	ブルー	14
70	スポーティ	4	82	シャープ	12
70	ディテール	4	89	サイズ	11
70	●プリーツ	4	89	デビュー	11
70	プレーン	4	104	●パフスリーブ	10
70	ページュ	4	116	NG	9
70	モノグラム	4	116	OK	9

戦前昭和時代では、ファッション的な外来語として、明治・大正時代にはなかった「ワンピース」「ノースリーブ」「パフスリーブ」といった複合語が登場してきている。ちなみにこの3語は、複合名詞の形で取り入れられた語であり、造語成分ごとに時代認定したものではない。

表6 現代に取り入れられた外来語

ミセス 25語 ●=14語			JJ 25語 ●=10語		
順位	語	度数	順位	語	度数
4	●パンツ	26	2	●ニット	157
11	●ニット	22	3	●パンツ	151
15	フォルム	16	6	●デニム	128
18	カジュアル	14	8	コーデネート(コーデ)	102
21	コーデネート	13	10	カジュアル	95
22	アイテム	12	13	ゴージャス(ゴ-)	85
24	ブランド	10	11	アイテム	84
29	●Tシャツ	9	●ミニスカート(ミニ/		
29	トレンド	9	14	ミニスカ)	66
31	●ツイード	8	19	●トップス	53
31	●パンツスーツ	8	25	●ストレッチ	44
31	●ボトム	8	25	セクシー	44
37	●コーデュロイ	7	29	タイト	37
37	●ストレッチ	7	36	●アンサンブル	27
37	ベーシック	7	36	●コーデュロイ	27
45	●アンサンブル	6	39	デート	25
45	フィット	6	39	ブランド	25
45	●フリル	6	43	トレンド	24
45	マニッシュ	6	50	モノトーン	19
45	メンズライク	6	52	フィット	18
59	●スエード	5	52	●ボトムス	18
59	●トリミング	5	57	ステッチ	17
59	●ドレープ	5	65	キープ(KEEP)	15
59	フェミニン	5	65	キュート	15
59	●ポリエステル	5	65	クール	15
			65	●ブルゾン	15

現代では、ファッションに直接関係する外来語が占める割合は、ミセスが14語/25語、JJが10語/25語と、他の3時代と比べるとその割合がやや高いと言える。現代は、ファッションに直接関係する外来語がバラエティ豊かに取り入れられていると言えよう。



#### 2.3.4 時代別比率のまとめ

以上、第1段階から第3段階の作業を通して、時代別に外来語の側面を見てきた。一口に外来語といっても、洋服を表現する際には、時代によってその用いられ方の傾向に違いがあることが分かった。ここでもう一度、それぞれの時代ごとの特徴をまとめると以下のようなろう。

明治・大正時代に取り入れられた語は、繰り返し使用され、基本的で重要なものが多い。その基本的で重要な語は、明治時代はファッションとは直接に関係しない外来語が多く、対照的に大正時代はファッションに直接関係する外来語が多く取り入れられているという傾向が見てとれた。

また、現代に取り入れられた語は、繰り返し使用されるものよりも、1、2回の度数でバラエティ豊かに登場し、その使われ方もその場限りで終わりといった印象が強いものが多い。またそれらは、ファッションと直接関係する外来語が比較的多い傾向にある。

ファッション雑誌に現れる外来語には、以上に述べてきたような一側面があることを明らかにしてきたのだが、「何度も繰り返し使用される」いわゆる高頻度語と、そうでない低頻度語の違いは一体何であろうかという疑問が生まれてくる。

以上に示してきた図や個々の語を眺めてみて、その疑問に対する答えのひとつを、あくまで推測の域をでないが、記してみたい。

冒頭で「日本語化した外来語」という表現を使ったが、「何度も繰り返し使用される」外来語と、そうでない外来語の違いは、「日本語化」している度合い、つまり、日本語としてのなじみの深さの違いではないだろうかと考える。

外国語が外来語となったときは、もう外国語ではなく、日本語の一部となっているのであり、外来語は日本語であるのだが、一方で外来語は、「語の入れ替わりが激しい」という一面も持っている。

その外来語の中で、特定の分野（ファッション雑誌）という条件付きではあるが、明治・大正時代に取り入れられ、現在も繰り返し使用されている語は、歴史的な観点から見ても、極めて日本語化した外来語だと言えそうだ。

つまり、何度も繰り返し使用されるいわゆる高頻度の外来語は、日本語に、より同化・浸透している語であり、そうでない外来語は、将来的には、別の語に入れ替わったり、あるいは使用されなくなったりする可能性を含んでいて、立場が揺れている語だと捉えられる。

言い換えれば、高頻度で現れる外来語は、日本語としてすでに定着している語であり、そうでない外来語は、まだ定着していない、あるいは将来定着するかどうかは今のところ分からない、日本語としては不安定な立場にある語であると言えるだろう。

2.2では、ミセス・JJ両誌に共通する34語を示したが、それらを時代別に分類してみると、明治11語、大正3語、戦前昭和10語、現代10語であり、やはり、明治時代に取り入れられた語が一番多いという結果であった。そのことも、以上の推測を確実なものに近づける要素のひとつになり得るのではないだろうか。

### 3. おわりに

以上、ファッション雑誌の洋服紹介記事に現れる外来語の使用状況について、その取り入れられた時代の別を、主な考察の観点として分析してきた。

入れ替わりが激しいと言われる外来語が、1つの媒体の中でどのような使われ方をしているのか、時代別に振り分けることによって、その一側面を明らかにすることを試みたわけだが、その結果、おおよそ次のようなことが言えるだろう。

比較的最近の、現代に新しく取り入れられた外来語は、少ない度数で多種登場しており、ファッション雑誌の語彙を、バラエティ豊かで、いざなりあざやかなものになっている。しかし、そのような低頻度の外来語は、日本語として定着するかどうかという視点で見れば、その力は未知数である。

一方、開国直後、洋服が流入し始めた、明治・大正時代に取り入れられた外来語の多くは、雑誌に使用される語全体の中での割合は少ないが、何度も繰り返し使用され、ファッションを述べる際の基本的で重要な語としての位置にある。また、そういった繰り返し使用される語は、実は決して少なくな

く、高頻度語として多数登場していることが明らかになった。これらの語は、時代を経ても淘汰されずに生き残り、すでに日本語として定着していると捉えられるものである。

外来語は、その取り入れられた時代の別によって、ファッション雑誌の表現の中で、担う役割を分担していると言えるのである。

## 5. 両雑誌総合の語彙表

最後に両雑誌を総合して、度数10以上（パーミル延べ0.5以上）の語を度数順語彙表として次ページ以降に示す。

両雑誌から得られたデータの具体的な語数は、語彙表の末尾に記す。

## 参考文献

- 石綿敏雄編『基本外来語辞典』東京堂出版（1990年）  
石綿敏雄『外来語の総合的研究』東京堂出版（2001年）  
石野博史『現代外来語考』大修館書店（1983年）  
上野景福「西洋外来語—その歴史と問題点—」『日本語学』4—9（1985年）  
国立国語研究所『雑誌九十種の用語用字(3)分析』国立国語研究所報告25  
（1964年）  
佐竹秀雄・岸本千秋「新聞第一面の語彙—1997年の新聞3紙を資料として」  
『武庫川女子大学言語文化研究所年報』第10号（1998年）  
林 大ほか『図説日本語 グラフで見ることばの姿』角川書店（1982年）  
国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版（1980年）

## 調査に使用した雑誌

『ミセス』発行部数18万部 文化出版局

『JJ』発行部数70万部 光文社

以上、『新聞雑誌総かたろぐ』2001年版 メディア・リサーチ・センター  
（株）による

語彙表 両雑誌総合 度数10 (パーミル0.5) 以上

順位	語	語種	度数	%	順位	語	語種	度数	%
1	する		W	1373	34	夏	W	61	2.9
2	いる	W	228	11.0	35	きれいだ	K	60	2.9
3	秋	W	212	10.2	35	印象	K	60	2.9
4	ある	W	182	8.8	37	アイテム	G	59	2.9
5	合わせる	W	161	7.8	37	コ	W	59	2.9
6	ワンピース (ワンピ)	G	155	7.5	39	可愛い	W	58	2.8
6	着る	W	155	7.5	40	大人っぽい	W	56	2.7
8	見える	W	150	7.3	41	こと	W	55	2.7
9	なる	W	144	7.0	41	入る	W	55	2.7
10	ジャケット	G	132	6.4	43	ない	W	54	2.6
11	この	W	129	6.2	43	シャツ	G	54	2.6
11	パンツ	G	129	6.2	45	くれる	W	53	2.6
13	ニット	G	126	6.1	45	服	W	53	2.6
14	黒	W	124	6.0	47	コレ	W	51	2.5
15	スカート	G	122	5.9	47	ピンク	G	51	2.5
16	ライン	G	103	5.0	47	上品だ	K	51	2.5
16	色	W	103	5.0	50	カーディガン (カーデ)	G	50	2.4
18	もの	W	100	4.8	50	多い	W	50	2.4
19	人気	K	91	4.4	52	赤	W	48	2.3
20	コーデネット	G	89	4.3	53	高い	W	47	2.3
21	デニム	G	88	4.3	53	中	W	47	2.3
21	見せる	W	88	4.3	55	トップス	G	45	2.2
23	スタイル	G	86	4.2	56	今シーズン	M	44	2.1
24	シンプル	G	77	3.7	56	着こなす	W	44	2.1
25	デザイン	G	76	3.7	58	ウエスト	G	43	2.1
25	選ぶ	W	76	3.7	58	ベージュ	G	43	2.1
27	私	W	72	3.5	58	春	W	43	2.1
28	素材	K	71	3.4	61	いう	W	40	1.9
29	カジュアル	G	70	3.4	61	女のこらしい	W	40	1.9
30	シルエット	G	69	3.3	61	欲しい	W	40	1.9
31	今年	W	65	3.1	64	いつも	W	39	1.9
32	白	W	64	3.1	64	チェック	G	39	1.9
33	ポイント	G	63	3.0	64	買う	W	39	1.9

順位	語	語種	度数	%	順位	語	語種	度数	%
67	こんな	W	38	1.8	103	まとめる	W	27	1.3
68	細身	W	37	1.8	103	センタープレス	G	27	1.3
69	エレガント	G	36	1.7	103	プラスする	M	27	1.3
69	ディテール	G	36	1.7	106	かなり	W	26	1.3
69	今	W	36	1.7	106	もう	W	26	1.3
72	いい	W	35	1.7	106	アンサンブル	G	26	1.3
72	感じ	W	35	1.7	106	使う	W	26	1.3
72	時	W	35	1.7	106	袖	W	26	1.3
72	取り入れる	W	35	1.7	106	他	W	26	1.3
76	ちょっと	W	34	1.6	106	優しい	W	26	1.3
76	形	W	34	1.6	113	はく	W	25	1.2
76	持つ	W	34	1.6	113	よる	W	25	1.2
76	小物	W	34	1.6	113	ストレッチ	G	25	1.2
76	定番	K	34	1.6	113	トレンド	G	25	1.2
76	流行	K	34	1.6	113	ブラウス	G	25	1.2
82	アクセント	G	33	1.6	113	ボンボン	W	25	1.2
82	セクシー	G	33	1.6	113	効く	W	25	1.2
84	イメージ	G	32	1.5	113	作る	W	25	1.2
84	インナー	G	32	1.5	113	使える	W	25	1.2
84	ミニスカート	G	32	1.5	113	思う	W	25	1.2
87	脚	W	31	1.5	113	自分	K	25	1.2
87	人	W	31	1.5	113	裾	W	25	1.2
87	大人	W	31	1.5	125	なりすぎる	W	24	1.2
90	タイト	G	30	1.5	125	肩	W	24	1.2
90	一枚	K	30	1.5	125	見る	W	24	1.2
92	ため	W	29	1.4	128	つける	W	23	1.1
92	つく	W	29	1.4	128	みる	W	23	1.1
92	コーデュロイ	G	29	1.4	128	少し	W	23	1.1
92	一番	K	29	1.4	128	新しい	W	23	1.1
92	襟	W	29	1.4	128	新鮮だ	K	23	1.1
92	女らしい	W	29	1.4	133	ところ	W	22	1.1
92	雰囲気	K	29	1.4	133	ウール	G	22	1.1
99	ボタン	G	28	1.4	133	可愛ゴー娘	M	22	1.1
99	華やかだ	W	28	1.4	133	基本	K	22	1.1
99	気になる	M	28	1.4	133	気に入る	M	22	1.1
99	柄	W	28	1.4	133	太もも	W	22	1.1

洋服を表す外来語の一特徴

順位	語	語種	度数	%	順位	語	語種	度数	%
133	体	W	22	1.1	166	考える	W	19	0.9
133	大好きだ	M	22	1.1	166	合う	W	19	0.9
133	美しい	W	22	1.1	166	装い	W	19	0.9
142	とき	W	21	1.0	166	表情	K	19	0.9
142	やっぱり	W	21	1.0	179	いっぱい	K	18	0.9
142	カーキ	G	21	1.0	179	お嬢さん	M	18	0.9
142	シルク	G	21	1.0	179	みたいだ	W	18	0.9
142	ブランド	G	21	1.0	179	よく	W	18	0.9
142	プラス	G	21	1.0	179	ゴージャス	G	18	0.9
142	リボン	G	21	1.0	179	格好	K	18	0.9
142	丈	W	21	1.0	179	楽しむ	W	18	0.9
142	狙う	W	21	1.0	179	購入する	M	18	0.9
142	長い	W	21	1.0	179	最近	K	18	0.9
142	魅力	K	21	1.0	179	細い	W	18	0.9
153	すっきり	W	20	1.0	179	秋冬	W	18	0.9
153	シャープ	G	20	1.0	179	秋物	W	18	0.9
153	スタイル美人	M	20	1.0	179	女性	K	18	0.9
153	バランス	G	20	1.0	192	blondy	G	17	0.8
153	レザー	G	20	1.0	192	その	W	17	0.8
153	意識する	M	20	1.0	192	ます	W	17	0.8
153	気	K	20	1.0	192	カッコよい	M	17	0.8
153	好き	W	20	1.0	192	ゴールド	G	17	0.8
153	腰	W	20	1.0	192	デート	G	17	0.8
153	上質だ	K	20	1.0	192	ノースリーブ	G	17	0.8
153	新鮮	K	20	1.0	192	ブランケデニム	G	17	0.8
153	着こなせる	W	20	1.0	192	ボトムス	G	17	0.8
153	特に	W	20	1.0	192	モノトーン	G	17	0.8
166	1枚	M	19	0.9	192	位置	K	17	0.8
166	Vネック	G	19	0.9	192	可愛らしい	W	17	0.8
166	お気に入り	M	19	0.9	192	感じる	M	17	0.8
166	ひょう柄	M	19	0.9	192	気分	K	17	0.8
166	クイーンズコート	G	19	0.9	192	仕上げる	W	17	0.8
166	コート	G	19	0.9	192	着こなし	W	17	0.8
166	タイプ	G	19	0.9	192	明るい	W	17	0.8
166	ベルト	G	19	0.9	192	目立つ	W	17	0.8
166	軽やかだ	W	19	0.9	210	Tシャツ	G	16	0.8

順位	語	語種	度数	%	順位	語	語種	度数	%
210	おすすめ	W	16	0.8	240	トリミング	G	14	0.7
210	きちんと	W	16	0.8	240	パンツスタイル	G	14	0.7
210	さらに	W	16	0.8	240	フリル	G	14	0.7
210	ぴったり	W	16	0.8	240	ブルー	G	14	0.7
210	みんな	W	16	0.8	240	ベーシック	G	14	0.7
210	もちろん	K	16	0.8	240	ポケット	G	14	0.7
210	シンプルズ	G	16	0.8	240	ボンボン付き	M	14	0.7
210	スーツ	G	16	0.8	240	開く	W	14	0.7
210	セレクト	G	16	0.8	240	甘い	W	14	0.7
210	フォルム	G	16	0.8	240	胸元	W	14	0.7
210	楽しめる	W	16	0.8	240	見え	W	14	0.7
210	去年	K	16	0.8	240	行く	W	14	0.7
210	購入	K	16	0.8	240	今年らしい	W	14	0.7
210	出る	W	16	0.8	240	施す	W	14	0.7
210	豊富だ	K	16	0.8	240	出す	W	14	0.7
226	たくさん	K	15	0.7	240	春夏	W	14	0.7
226	デートスタイル	G	15	0.7	240	女らしさ	W	14	0.7
226	ヒップハング	G	15	0.7	240	新作	K	14	0.7
226	フィットする	M	15	0.7	240	着心地	W	14	0.7
226	ミニ	G	15	0.7	240	注目	K	14	0.7
226	ワイドパンツ	G	15	0.7	240	目指す	W	14	0.7
226	股上	W	15	0.7	268	D&G	G	13	0.6
226	後ろ	W	15	0.7	268	Iライン	G	13	0.6
226	似合う	W	15	0.7	268	いく	W	13	0.6
226	手持ち	W	15	0.7	268	これから	W	13	0.6
226	女のコらしさ	W	15	0.7	268	さり気ない	W	13	0.6
226	前	W	15	0.7	268	ちょっぴり	W	13	0.6
226	短め	W	15	0.7	268	できる	W	13	0.6
226	変わる	W	15	0.7	268	ひざ丈スカート	M	13	0.6
240	くる	W	14	0.7	268	カットソー	G	13	0.6
240	こだわる	W	14	0.7	268	キレイだ	K	13	0.6
240	よい	W	14	0.7	268	ツイード	G	13	0.6
240	イける	W	14	0.7	268	ツインニット	G	13	0.6
240	キュート	G	14	0.7	268	ニュアンス	G	13	0.6
240	キレイ色	M	14	0.7	268	バック	G	13	0.6
240	チョイス	G	14	0.7	268	ピッタリ	W	13	0.6

洋服を表す外来語の一特徴

順位	語	語種	度数	%	順位	語	語種	度数	%
268	ブルゾン	G	13	0.6	296	色使い	W	12	0.6
268	ボーダー	G	13	0.6	296	大きい	W	12	0.6
268	引き続き	W	13	0.6	296	大好き	M	12	0.6
268	羽織る	W	13	0.6	296	短い	W	12	0.6
268	可愛さ	W	13	0.6	296	知的だ	K	12	0.6
268	仕上がる	M	13	0.6	296	中心	K	12	0.6
268	絶対	K	13	0.6	296	注目する	M	12	0.6
268	鮮やかだ	W	13	0.6	296	程よい	W	12	0.6
268	多く	W	13	0.6	296	買い足す	W	12	0.6
268	添える	W	13	0.6	296	白シャツ	M	12	0.6
268	登場	K	13	0.6	296	与える	W	12	0.6
268	冬	W	13	0.6	330	Aライン	G	11	0.5
268	分量	K	13	0.6	330	お嬢さんらしい	W	11	0.5
296	かける	W	12	0.6	330	しまう	W	11	0.5
296	そんな	W	12	0.6	330	ひざ丈	W	11	0.5
296	はず	W	12	0.6	330	より	W	11	0.5
296	インタープラネント	G	12	0.6	330	コットン	G	11	0.5
296	カラー	G	12	0.6	330	ジル	G	11	0.5
296	クール	G	12	0.6	330	ストレンチ素材	M	11	0.5
296	ステッチ	G	12	0.6	330	スニーカー	G	11	0.5
296	パイピング	G	12	0.6	330	タートル	G	11	0.5
296	ファー	G	12	0.6	330	タイトスカート	G	11	0.5
296	ブーツ	G	12	0.6	330	パリエーション	G	11	0.5
296	ブーツカット	G	12	0.6	330	ボリュウム	G	11	0.5
296	ベスト	G	12	0.6	330	一つ	W	11	0.5
296	ベルト付き	M	12	0.6	330	下	W	11	0.5
296	ミセス	G	12	0.6	330	甘さ	W	11	0.5
296	ミュール	G	12	0.6	330	胸	W	11	0.5
296	ラインストーン	G	12	0.6	330	衿	W	11	0.5
296	ラメ	G	12	0.6	330	股浅	W	11	0.5
296	可愛ゴー	M	12	0.6	330	合わせやすい	W	11	0.5
296	華やかさ	W	12	0.6	330	作り	W	11	0.5
296	強調する	M	12	0.6	330	残す	W	11	0.5
296	好きだ	W	12	0.6	330	上品さ	M	11	0.5
296	差し色	W	12	0.6	330	人気急上昇	K	11	0.5
296	時代	K	12	0.6	330	水玉	W	11	0.5



順位	語	語種	度数	%	順位	語	語種	度数	%
330	全体	K	11	0.5	366	カッティング	G	10	0.5
330	組合せ	W	11	0.5	366	キンプリスリーブ	G	10	0.5
330	爽やかだ	W	11	0.5	366	クラシカル	G	10	0.5
330	着回し	W	11	0.5	366	グレー	G	10	0.5
330	動きやすい	W	11	0.5	366	パーカ	G	10	0.5
330	同じ	W	11	0.5	366	メンズライク	G	10	0.5
330	特徴	K	11	0.5	366	ラブリー	G	10	0.5
330	日	W	11	0.5	366	違う	W	10	0.5
330	配色	K	11	0.5	366	季節	K	10	0.5
330	目	W	11	0.5	366	脚長効果	K	10	0.5
330	良い	W	11	0.5	366	衿もと	W	10	0.5
366	BUTSUYOKUSHISU	K	10	0.5	366	黒服	W	10	0.5
366	おしゃれ	M	10	0.5	366	秋デビュー	M	10	0.5
366	きちんと感	M	10	0.5	366	女のコ	W	10	0.5
366	しっかり	W	10	0.5	366	女性らしさ	M	10	0.5
366	しなやかだ	W	10	0.5	366	全身	K	10	0.5
366	どんな	W	10	0.5	366	誰	W	10	0.5
366	ひとつ	W	10	0.5	366	通学	K	10	0.5
366	やや	W	10	0.5	366	提案する	M	10	0.5
366	イエロー	G	10	0.5	366	登場する	M	10	0.5
366	イブダ	G	10	0.5	366	漂う	W	10	0.5
366	エレガンス	G	10	0.5	366	便利	K	10	0.5
366	オリジナル	G	10	0.5	366	立てる	W	10	0.5

両雑誌から得られたデータは、

	異なり	延べ	
『ミセス』	1,935語	4,699語	
『J J』	4,059語	15,974語	
合 計	6,634語	20,673語	である。

## 日韓男女のあいづちの対照研究

姜 昌 妊

### 0. はじめに

会話は話し手と聞き手の相互作用に成り立っている。聞き手はあいづちによって、話を聞いている、理解しているというメッセージを話し手に送り、話し手はあいづちに助けられ、話を盛り上げたり、さらに発展させたりすることができる。日本語の会話においては、聞き手は頻繁にあいづちを打ち、時には発話を補い、話し手と共同で発話を作り上げていくといわれている。あいづちは日本語の会話において円滑なコミュニケーションを行うために重要な要素であり、その果たす役割と大きいといえよう。しかしこのようなあいづちの頻度、表現形態、機能はそれぞれの言語、文化によってさまざまであり、それが日本人と外国人のコミュニケーションの障害を引き起こすひとつの要因になっている。十分な語彙と高度の文法知識を身につけた韓国語日本語学習者からも、日本人との会話において適切なあいづちを打つことができず、スムーズに会話を行えなかったという話をよく耳にする。

今まで韓国語と日本語のあいづちに関する対照研究は生越 (1988) と、金 (1993) と、任・李 (1995) などがあり、その研究はまだ多いとは言えない。さらにこれらの研究はあいづちの頻度、表現形式、タイミングなどに関するものであり、あいづちの機能に関する研究は殆ど行われていない。またその資料のほとんどがテレビやラジオのように非常に改まった場面での会話であり、さらにあいづちの頻度に大きな影響を及ぼす会話参加者の人数、性別、年齢、人間関係などの参加者構成にも不明な点が多く、両国の間に違いが見られる。

以上の点を考慮し、本稿では会話参加者の人数、性別、人間関係、年齢などをはじめとし、その他の条件をできるだけ統一させ、インフォーマルな場面で、実際行われた自然会話を対象にし、聞き手の言語行動であるあいづち

の実態調査を行った。両国のあいづちの頻度、表現形式、機能を調査し、あいづちの量的、質的な分析を行い、両言語のあいづちの類似点・相違点または男女の違いを見出すことを研究の目的とした。

## 1. 調査方法

### 1.1 被験者

韓国人は韓国語を母語とし、日本人は日本語を母語とする20代の大学生である。大学の知人や友達紹介によって、同年代の同性の親しい友人の2人が1組になって会話に参加した。参加者は韓国、日本それぞれ女性5組(10人)、男性5組(12人)、計10組(20人)である。韓国人はソウルや京畿道の大学に在学中であり、釜山出身者一人を除いてソウルや京畿道の出身である。平均年齢は韓国女性20.8歳であり、韓国男性20.3歳である。日本人は神戸市にある大学に在学中であり、20人のうち、13人は関西出身であり、7人は他の地方出身であるが、過去最低1年間以上関西地方に居住している。平均年齢は日本人女性20歳であり、日本人男性19.3歳である。なお参加者には調査内容については詳しく言わず、会話分析研究のための調査だと簡単に説明しておいた。

### 1.2 データ収集方法

韓国、日本ともに大学の講義室を録画室として使用した。二人の参加者が録画室に入場し、お互いに半分向かい合うような形で斜めに前を向いた姿勢でテーブルを前にして座ってもらった。その際、参加者を撮影するためのビデオカメラを対話者の席から前方約2m離れたところに置き、音声を録音するための小型マイクつきのテーブルコーダーを二人の真中に置いた。録画と録音の際、調査者はビデオカメラとテーブルコーダーが自動的に操作できるように設定しておき、席を外した。つまり参加者二人だけが録画室に残り、できるだけ自然な会話ができるようにした。参加者には、普段話す時と同じように何でも自由に話すように頼んだ。なるべく自然な形での日常会話ができるように会話のテーマや話の進め方について何の指示も与えず、参加者が

自由に選ぶようにした。会話の録画と録音は各組30分ずつ行い、録画終了後、各自に質問紙を配り、会話参加者の経歴、その相手と、会話の満足度などについて記入してもらった。

会話は会話開始から最初の10分間を除き、それに続く10分間を分析の対象とした。その際、もし、ある一方の話し手が話をしている途中の場合は、その話し手の話が終わり、ターン<sup>(注1)</sup>が交替し、次の話し手が話し始めた時から時間を測った<sup>(注2)</sup>。このような方法で韓国人と日本人、それぞれ男性5組、女性5組、計10組の各10分間計100分のデータを文字化を起こし、それを資料として用いた。

## 2. あいづちの定義と表現形式とあいづちの機能

あいづちの定義は研究者によって見解が異なっており、まだ定まった定義がない。本稿ではあいづちを広義に解釈する立場に立ち、メイナード(1993)を参考にしてあいづちとは「話し手が発話権を行使している間にまたは話し手の発話終了した直後に、発話権を持たない聞き手が送る短い表現」と定義づけ、以下の二つに分類する。

### (a) 狭義のあいづち

「あいづち詞」：一般的にあいづちといわれてものとして、「うん」、「ふん」、「ええ」「そう」「ほんとう」「なるほど」「そうですね」などのような感動詞、応答詞、副詞。

### (b) 広義のあいづち(あいづち的表現)

実質的な内容を含む聞き手の反応。

「繰り返し」：先行する話し手の発話の一部または全部を繰り返すこと

「言い換え」：先行する話し手の発話の一部または全部を自分の言葉で再現すること。

「先取り」：話し手がこれから言おうとすることを予測して先に言ったり、話し手の文を完成させたりすること。

「コメント」：先行する話し手の発話に対して、意見・感想を述べるような短い発話。「いいなー」「すごい」「よかったな」とかなど。

以下でいうあいづちとは狭義のあいづち、広義のあいづちの両者を含めて指すものである。しかしこれらのあいづちには話し手の質問、呼びかけ、命令、要請などに対する答えは含まれていない。また、話し手の先行発話の不明なことを明らかにするための聞き返し及び理解できなかった部分について説明要求などはあいづちとしない。

日本語のあいづちの機能に対しても研究者によって様々な見方があるが、本稿では向井（1998）、堀口（1997）、楊晶（2001）などに基づいて以下の三つの機能に分類する。

- ① 継続、理解の表示：話し手の発話を聞いていることまたは話し手が伝えた情報について理解したことを伝える。以下「継続・理解」と略す。
- ② 同意・共感の表示：話し手の話を聞いて理解し、更にそれに対し同意（または否定）、共感を表明する。以下「同意・共感」と略す。
- ③ 感情の表出：話し手の話を聞いて感じた驚き、喜び、悲しみ、不信、同情、謙遜、いたわりなどの感情や心情を表したり、興味・関心を示したりする。

以上の機能はそれぞれ対立的なものではなく、一つのあいづちが同時に二つ以上の機能を持つことがある。その場合は会話の流れの中でどのような機能に重点がおかれているかを会話の全体及び前後から判定し、3機能のうち主となる機能へ分類した<sup>(注3)</sup>。

### 3. 調査の分析及び考察

#### 3.1 あいづちの頻度

あいづちの頻度については、水谷信子（1983）の「時間を単位とした頻度」「音節を単位とした頻度」及び黒崎（1987）の「総発話文数に対するあいづち文の割合」等様々であるが、本稿では「音節を単位とした頻度」<sup>(注4)</sup>と「時間を単位とした頻度」、「文節（語節）を単位とした頻度」<sup>(注5)</sup>を調べた。

表1. 韓国人と日本人のあいづちの頻度の男女差(注6)

	あいづち の回数	1分当り のあいづ ちの回数	1分当り の平均音 節数	あいづち間 の音節数	1分当り の平均文 節(語節)数	あいづち 間の文節 (語節)数
日本人男性(A)	593	11.9	323	27.1	97.2	8.2
日本人女性(B)	714	14.3	315	22.0	97.8	6.8
(A)・(B)の平均		13.1	319	24.4	97.5	7.4
韓国人男性(C)	350	7.0	269	38.4	111.6	15.9
韓国人女性(D)	690	13.8	330	23.9	137.9	10.0
(C)・(D)の平均		10.4	299	28.8	124.8	12.0

まず表1の1分間当りのあいづちの回数を見ると、日本人が13.1回、韓国人が10.4回で、日本人の方が多い。そしてあいづちの間の音節数は日本人が24音節、韓国人は29音節である。また意味のまとまりである文節(語節)を単位としたあいづち間の文節(語節)数は日本人が7.4文節、韓国人が12語節である。時間を単位とした頻度、音節、文節(語節)を単位とした頻度ともに、韓国人より日本人の方が高いことがわかる。日本人はアメリカ人よりあいづちが2倍以上多く(メイナード1987)、また中国人よりもあいづちを頻繁に打つという研究結果もあったが(劉1987)、今回の調査結果でも、あいづちを頻繁に打つという日本人の会話の特徴を裏付ける結果となった。

次は男女別に分け、1分間当りのあいづちの頻度とあいづち間の音節数とあいづち間の文節(語節)数とを見ると、両国ともに男性より女性のあいづちの頻度が高いことがわかる。女性の方が男性よりあいづち率が高いという先行研究(黒崎1987、堀口1991)があり、本調査でもこのことが確認できた。1分当りのあいづちの回数をもって両国の男女の差を見ると、日本人の女性(14.3回)は男性(11.9回)に比べ約1.2倍多いのに対し、韓国人女性(13.8回)は男性(7.0回)より約2倍多く、日本人に比べ韓国人の男女の差が大きいことがわかった。

任・李(1995)によれば日本人に比べ韓国人は「あいづちを多く打つ人に対しマイナス評価を、あいづちをほとんど打たない人に対しては逆にプラス評価をする」としている。また生越(1988)は韓国人があいづちを打たない

ことについて「あいづちをいちいち打たれるといい気持ちがしない」、「あいづちを打ちすぎる人は軽く見え、重みがなくなる」ということを挙げている。しかし、このような韓国人のあいづちの特徴は、とりわけ韓国人の男性に当てはまるようである。韓国では儒教の影響や軍隊制度などによって、男としてあるべき行動様式が男の人に強く求められているようである。韓国語には「남아일언중천금（男児一言重千金）：男児の一言は千金より重し」ということわざがある。つまり男性は自分のしっかりした考えをもって発言し、また自分が話した発話についてはその責任を果たすべきだという意味が込められている。またミンヒョンシク（1997）が韓国の男女大学生を対象にし、「男らしい」ということばの意味から連想される単語を調査したところ、「男らしい」ということばの中に「과묵하다（寡黙だ、ことば数が少ない）、무뎅하다（無愛想だ）」という言葉があった。このように韓国の社会では自分なりのしっかりした主張や意見を持って慎重に行動し、言動を慎む人が男らしいと高く評価されているので、必要以上にあいづちを打つ人は、自分なりの考えや主張を持たずに、相手の意見に合わせようとする主体性のない人、軽い人と見られる恐れがあるので、あいづちの頻繁な使用を控え目にしていたと思われる。

### 3.2 あいづちの形態とあいづちの種類

両国の会話で用いられたあいづちを、形態別に分類して示したものが表2である。両国ともにあいづち詞の比率が一番高いが、そのような傾向は韓国人の方が強かった。そのような韓国人に比べ、日本人は「繰り返し」、「言い換え」、「コメント」のような「広義のあいづち」を比較的頻繁に用いていた。「広義のあいづち」は「うん」、「そう」等の「あいづち詞」に比べ、聞き手の話し手の発話へのより積極的な参加を表し、話し手により有効的に働きかけるあいづちである。つまり日本人はより能動的な意味を持つ「広義のあいづち」を用い、話し手の発話に対し強い共感と高い関心を示し、話し手と共同で発話を作り上げたのである。

表2. あいづちの形態と回数

あいづち の 形 態	日 本 人			韓 国 人		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計
あいづち 詞	468 (78.9%)	573 (80.3%)	1,041 (79.6%)	294 (84%)	594 (86.1%)	888 (85.4%)
繰 り 返 し	57 (9.6%)	27 (3.8%)	84 (6.4%)	29 (8.3%)	8 (1.2%)	37 (3.6%)
言 い 換 え	17 (2.9%)	15 (2.1%)	32 (2.4%)	4 (1.1%)	5 (0.7%)	9 (0.9%)
先 取 り	27 (4.6%)	42 (5.9%)	69 (5.3%)	10 (2.9%)	51 (7.4%)	61 (5.9%)
コ メ ン ト	24 (4.0%)	57 (8.0%)	81 (6.2%)	13 (3.7%)	32 (4.6%)	45 (4.3%)
合 計	593	714	1,307	350	690	1,040

次にあいづち形態の男女の違いを見ると、両国ともに男性は女性に比べ「繰り返し」の割合が高い。日本人女性は日本人男性に比べ「コメント」の割合が高く、韓国女性には韓国男性に比べ「先取り」の割合が比較的に高いことがわかる。男性の「繰り返し」の中には相手の発話に対する同意を示すものもあったが、特に多かったのは、驚き、面白さ、疑い、意外などという感情を伴い、話し手の発話に対し興味を示したり、控え目な確認をしたりするものであった。「繰り返し」について、堀口（1997）は「聞き手は話し手の発話の中で特に関心を持つ部分があればその一部分を繰り返す」とし、小宮（1986）は「相手の発話の一部をもう一度繰り返すことによって、情報を確認したり、強調したりする」と述べた。つまり男性は話し手の発話が自分の関心のある方面に発展するように、自分が興味を持っている部分を話し手に積極的に示していたと思われる。それに対し、女性の「繰り返し」には話し手の発話に対し同意や共感を示すものが多かった。女性のそのような態度は「コメント」と「先取り」によって更に積極的に現れた。女性は「コメント」によって話し手と同様な意見、感情を共有することを示したり、「先取り」によって、話し手の発話を代わりに完成したりして、話し手の発話に積極的に参加し、話し手と共同で発話を作っていた。

そして次にあいづちの形態の中で最も多く用いられたあいづち詞はどのぐ



らの種類が使われたのであろうか。表3が示すように、100分間の会話の中で使われたあいづち詞の種類は日本人の方(418種類)が韓国人(232種類)より1.8倍ほど多い。つまり日本人は韓国人に比べより様々なあいづち詞を用い、相手の発話を熱心に聞いていることを話し手に積極的に示したことがわかる。

表3. あいづちのバリエーション数とあいづちの使用回数  
(男女、各5組計50分)

	バリエーション数	一人当りのバリエーション平均(5分)	50分間回数
日本人女性	244 (131)	24.4	573
日本人男性	174 ( 88)	17.4	468
日本人合計	418 (176)	平均20.9	合計1,041
韓国人女性	125 ( 59)	12.5	594
韓国人男性	107 ( 54)	10.7	294
韓国人合計	232 ( 91)	平均11.6	合計 888

( ) 内は同じ表現が重なっていない異なり数

また男女別にわけあいづち詞の種類をみると、両国ともにあいづちの頻度の高い女性はその種類も多様である(日本人女性は約1.4倍、韓国人女性約1.2倍)。黒崎(1987)と水谷信子(1984)は、話を引き出すことを目的とした談話においてはあいづちが頻繁になり、あいづちの形式が多彩になるとしている。上記の事実から、女性は話し手に配慮し、話し手が話しやすい雰囲気を作るために様々なあいづち詞を用い、相手の発話を興味深く聞いていることを伝え、話し手に積極的に働きかけたと推測される。

### 3.3 あいづちの機能

表4は両国の会話で用いられたあいづちを機能別に分けて示したものである。両国ともに「継続・理解」機能が多く、その次は「同意・共感」、「感情の表出」機能の順になっている。

表4. あいづちの機能別回数とその割合

あいづち の機能	日 本 人			韓 国 人		
	女性	男性	合計	女性	男性	合計
1. 継続・理解	362 (50.7%)	311 (52.5%)	673 (51.5%)	411 (59.6%)	193 (55.1%)	604 (58.1%)
2. 同意・共感	215 (30.1%)	188 (31.7%)	403 (30.8%)	197 (28.6%)	113 (32.3%)	310 (29.8%)
3. 感情の表出	137 (19.2%)	94 (15.9%)	231 (17.7%)	82 (11.9%)	44 (12.6%)	126 (12.1%)
合 計	714	593	1,307	690	350	1,040

これらのあいづちの機能のうち「継続・理解」機能は向井（1998）の知らせ（ただ単に聞いている、理解したということを知らせる）にあたり、「同意・共感」機能と「感情の表出」機能は向井（1988）の「態度」（話し手が言ったことに対して聞き手がどう感じたかを表示する）に相当する。この分類に従って分類してみると、「知らせ」機能が日本人51.5%、韓国人58.1%であり、「態度」は日本人話者48.5%、韓国人41.9%である。更に向井（1998）は「「知らせ」の機能より「態度」の機能を持つあいづちの方が、聞き手の積極的な会話への参加の態度を表す」としている。つまり日本人は韓国人よりポジティブな働きをするあいづちを用い、話し手の発話に積極的に協力し、話し手の発話を盛り立てようとしたのである。各機能別に両国の差を見ると「継続・理解」機能は韓国人より1.1倍多いのに対し、「同意・共感」機能は1.3倍、「感情の表出」機能は1.8倍それぞれ日本人が多い。「感情の表出」機能に差が大きいことがわかる。日本人の「感情の表出」機能が多いことについて、楊晶（2001）は「会話をする際、自分を相手に同調させ、相手になることが大切であるから会話者が共感的な場を基本として常に相手の気持ちを確かめ合いながら話を進めようとする」と述べている。つまり日本人は人間関係を大切にし、相手との関係の中で自分を位置付け、相手の立場になって、相手と同じ感情や考えを共有していることを積極的に示そうとしたのである。そしてそうすることによって話し手との一体感を高め、話し手の発話に積極的に参加し、話し手と共同で発話を作り上げていたのである。

次に両国の男女別にあいづちの機能を見ると、先ず両国ともに男性が女性

に比べあいづちが少なかったために、比率ではあまり大きな違いは見られないが、回数では大きな差があることがわかる。その違いを見ると、日本人の場合、男性に比べ女性の方が「継続・理解」機能は1.2倍、「同意・共感」機能は1.1倍、「感情の表出」機能は1.4倍それぞれ多い。特に「感情の表出」機能の差が大きいことがわかる。一般的に女性は男性に比べ、感情的な表現をより積極的に用い、相手と心情的に親密になろうとする傾向があるといわれているが、日本人女性にも同じような特徴が見られた。つまり日本人女性は相手を配慮し、話し手と同じ感情を共有することを積極的に示すことによって、話し手と聞き手の共通の場を作り、よりよい人間関係を維持しようとしたのである。このような女性の協調的な態度は両国に共通する特徴である。韓国人を見ると、女性が男性に比べ「継続・理解」機能は2.1倍、「同意・共感」機能は1.7倍、「感情の表出」機能は1.9倍多い。韓国人は特に「継続・理解」機能において大きな差が見られる。それは韓国人男性が「継続・理解」機能の中でも、相手の発話に対し理解を示すあいづちは多かったが、話を聞いていることを伝え続けるように促す「継続」のシグナルとしてのあいづちは少なかったからである。つまりあいづちの頻度の少ない韓国人男性は、相手の発話を聞いて理解し、同意し、関心を示す場合にはあいづちを頻繁に打つが、そうでない場合にはあまりあいづちを打たないことを意味する。その結果、韓国人男性は韓国人女性に比べ話者交替が多く、話し手一人当りの発話保持時間が短かったのである。

### 3.4 話し手の発話とあいづち

ここではあいづちが話し手の発話にどんな影響を及ぼしたのかを見るため、両国話者の話者交替と発話量を調べ、あいづちと関連づけて述べる。

日本人女性と男性、韓国人男性と女性のそれぞれ5組50分間の会話の中で、第一の話し手と第二の話し手のターンの回数は表5、表6の通りである。ターンの数に差があるのは10分間の発話中、会話の最初部分と最後部分を第一話し手がターンを取り、第一話し手のターンが一つ多い場合、5組の集計によるその差である。

表5. 日本人と韓国人のターンの回数

	日本人女性	日本人男性	韓国人女性	韓国人男性
第一の話し手	190	341	140	302
第二の話し手	185	336	137	297
第一と第二話手の平均	187.5	338.5	138.5	299.5
男性・女性の平均	263		219	

次に両国語話者二人が10分間の会話の中でどのぐらい話をしたかという発話量を意味のまとまりである文節（語節）と音節数で調査した。本稿での「発話量」とは「会話参加者が話し手になって発した実質的な発話」を意味し、聞き手がターンを取らずに発した発話、つまりあいづち及び重なり発話は含まれていない。詳しくは表6を参照していただきたい。

表6. 日本人と韓国人の発話量

	ターンの回数	文節(語節)数	ターン当り 文節(語節)数	音節数	ターン当り 音節数
日本人女性	375	4,887	13.0	15,763	42.0
日本人男性	677	4,860	7.2	16,142	23.8
日本人合計	1052	9,747	9.3	31,905	30.3
韓国人女性	277	6,893	24.9	16,509	59.6
韓国人男性	599	5,582	9.3	13,438	22.4
韓国人合計	876	12,475	14.2	29,947	34.2

50分間の発話中、話者交替が行われた回数を見ると、日本人は263回、韓国人は219回で、日本人の方が韓国人より約1.2倍多い。舟橋（1994）はTVのトーク番組を資料とし、話者交替の行われたターンの回数が日本人の方が韓国人より2倍以上だという結果を出した。本稿と舟橋（1994）の調査結果を並べると、場面がフォーマル、インフォーマルに関わらず、日本人の方が、韓国人より、話し手と聞き手が頻繁に入れ替わり、交替しながら、会話を進めているということがわかる。

次に両国の発話量について述べる。両国語の文法構造及び音韻構造が異な

るので単純な比較はできないが、音節を単位にしてみた全体の発話量は日本人が韓国人より多く、一回のターン当りの発話量は韓国人の方が多い。あいづちと関連付けてみると、日本人は韓国人よりあいづちを頻繁に用い、話し手の発話の進行を促し、話し手の発話が継続・維持するようにサポートしていた。このような協調的な態度は頻繁な話者交替にも現れ、日本人は相手の発話に関する質問または関連する情報を提供することで、相手が話しやすい雰囲気を作り、相手の話題が持続するように協力していたのである。それに対し、あいづちの少ない韓国人は日本人に比べ、話し手の話を聞き、話し手が発話を続けるよう援助するより、自ら話し手になって話そうとする傾向が強いといえよう。そのため話し手になると、自分の意見や主張をはっきり相手に示そうとするので、話が長くなり、話者交替頻度が少なくなったと思われる。

さらに、話者交替の回数をそれぞれの国の男女に分けて見ると、両国ともに女性より男性の方が多い。日本人男性は日本人女性より1.8倍、韓国人男性は韓国人女性より2.2倍として、男性が女性より約2倍ほど多く、話者が頻繁に交替し、活発な相互作用が行われていることがわかる。また、このように話者交替が頻繁に行われたのは、会話のペースが速く、一人の発話保持時間が短いことを意味する。それは逆に女性は日本人・韓国人ともに男性に比べ、一人の発話保持時間が長いことを意味する。

一回のターンにおける平均発話量を文節（語節）をもって見ると、日本人女性は日本人男性より1.8倍多く、韓国人女性は韓国人男性より2.7倍多い。江原他（1993）は、男性は自分のトピックに関係する限りにおいて興味を示す傾向があり、相手のトピックに興味を持たなければ、ほとんど「支持作業」をせず、むしろトピックの転換を選択するのに対し、女性は相手があるトピックを話していること自体に興味をもち、相手のトピックの展開を支持し、援助しようとするとは指摘している。本稿の調査でも両国ともに男性の話者交替が多く、女性のあいづちの多かったことはこのような男性と女性の会話の特徴によるものだと思われる。さらに黒崎（1987）は「女の長話し」は頻繁なあいづちの使用と関係があるとした。つまり、女性は話の内容より話すこと

自体、即ち会話の進行自体に興味を持ち、発話が持続するように頻繁にあいづちを打ち、その結果発話量が多くなったと思われる。それに対し、男性は話す内容を大切にし、自ら話し手になって、自分の意見や主張を述べようとするので、話し手が続けて話をできなくなり、発話時間が短くなったと思われる。

#### 4. まとめ

本稿では、日本と韓国の大学生の自然会話に用いられたあいづちの実態を調査し、その量的・質的な分析を行い、下記のような結果が得られた。

- 1) 時間当りのあいづちの頻度、音節、文節（語節）を単位にしたあいづちの頻度ともに、韓国人より日本人の方があいづちの頻度が高い。
- 2) 両国ともに男性より女性のあいづちの頻度が高い。日本人はあいづちの頻度の男女差が少ない（女性：男性の1.2倍）が韓国人は男女の差が非常に大きかった（女性：男性の約2倍）。韓国の男性は、必要以上にあいづちを頻繁に打つことは自分なりの考えや主張を持たずに、相手の意見に合わせようとする主体性のない人、軽い人と見られる恐れがあるので、あいづちの頻繁な使用を控え目にしていたと思われる。
- 3) 日本人は「繰り返し」、「言い換え」、「コメント」などの広義のあいづちを、韓国人はあいづち詞を相対的に頻繁に用いる傾向があった。また両国ともに男性は「繰り返し」を比較的に多く用いている。それに対し日本人女性は日本人男性より「コメント」を、韓国人女性は韓国人男性より「先取り」を多用していた。
- 4) あいづち詞については、あいづちの頻度の高い日本人が韓国人より、女性が男性より様々なあいづち詞を用いていた。
- 5) あいづちの機能の中で、日本人は韓国人に比べ「同意・共感」機能「感情の表出」機能が多かった。男女の違いを見ると、日本人の場合女性が男性より「感情の表出」機能がかった。韓国人の場合、女性が男性より「継続・理解」機能がかった。
- 6) 話し手の発話とあいづちの関係をみると、日本人は韓国人より話者交

替が多く、ターン当りの発話量は韓国人の方が多かった。また両国ともに、あいづちの頻度の高い女性が男性よりターン当りの発話量が多く、発話保持時間が長かった。

以上の結果、日本人は韓国人より、あいづちを頻繁にうつだけでなく、相手の発話に対し同意、共感、感情の共有を積極的に示すことによって、話し手の発話に積極的に協力し、話し手と共同で発話を作り上げるという共話の傾向が強かった。また日本人は男女の差が少なく、男女ともに共話の傾向が強いが、韓国人は男女の差が大きく、女性は共話、男性は対話という会話の特徴が明らかになった。本稿の研究結果は、異なる文化背景を持つ日本人と韓国人が実際の会話の場面で、互いの会話スタイルを理解し、コミュニケーションをするのに有用であると思われる。堀口（1997）が指摘するように、これらのあいづちは参加者の年代、性別、人間関係、会話の話題、会話の目的などによってかなり異なってくるので、さらに幅広い観点からの研究が必要である。しかしながら本稿では、同じ国の親しい同性友人同士の二人の会話だけを取り上げており、韓国人と日本人との会話、同性ではない異性同士の会話、年齢や地位などが異なる非対称的な人間同士の会話におけるあいづちについては考察することができなかった。これらのテーマについては今後の課題にしたい。

（注1） 本稿での「ターン」とは話し手が発話権を取って発話を始め、ポーズや他の話者の発話で区切られて話すのをやめるまでの一まとまりの発話を意味する。

（注2） その際、分析対象になった会話資料の中で最初話し始めた人が「第一の話し手」になり、話者交代が起こって次の話し手になった人が「第二の話し手」となる。

（注3） 「同意・共感」、「感情の表出」機能は「継続・理解」機能を前提にしているので、「同意・共感」と「感情の表出」機能が「継続・理解」機能を同時に表したとしても、「同意・共感」「感情の表出」機能に分類した。

- (注4) 本稿でいう音節とは猪塚元・猪塚恵美子(1993)がいう音節を指す。
- (注5) 語節とは系列関係と統合関係により区切られた一まとまりの言語単位である。文構成の単位であり、日本語の文節とはほぼ同じ概念である。
- (注6) あいづち間の音節数またはあいづち間の文節(語節)数とは前のあいづちと次のあいづちの間の音節数、文節(語節)数を指すものであり、「音節を単位とした頻度」、「文節(語節)を単位とした頻度」と同じ意味で使われている。

## 参考文献

- 猪塚元・猪塚恵美子(1993)『日本語の音声入門—解説と演習—』バベル・プレス
- 江原由紀子・好井裕明・山崎敬一(1993)「性差別のエスノメソドロジー」(れいのるず=秋葉つかえ編『おんなと日本語』、有信堂)
- 生越直樹(1988)「朝鮮語のあいづち—韓国人学生のレポートより—」『日本語学』第7巻第13号 明治書院
- 金秀芝(1994)「日・韓両言語における「あいづち」の対照研究—電話の会話を中心に」『日本語教育学会平成6年春季大会予稿集』
- 黒崎良昭(1987)「談話進行上のあいづちの運用と機能—兵庫県滝野方言について—」『国語学』150
- 小宮千鶴子(1986)「あいづち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』第3号大東文化大学語学教育研究所
- タネン、デボラ(田丸美寿々訳)(1992)『わかりあえない理由』講談社
- 舟橋宏代(1994)「談話の進行における日朝語話者の姿勢」『平成6年度日本語教育学会春季大会予稿集』
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 松田陽子(1988)「対話の日本語教育学—あいづちに関連して—」『日本語学』第7巻 13号 明治書院
- 水谷信子(1983)「あいづちと応答」『講座日本語の表現3 話しことばの



表現』筑摩書房

水谷信子(1984)「日本語教育と話しことばの実態－あいづちの分析－」  
『金田一春彦博士古希記念論文集 第二巻 言語学編』三省堂

水谷信子(1988)「あいづち論」『日本語学』第7巻第13号 明治書院

水谷信子(1993)「「共話」から「対話」へ」『日本語学』第12巻第4号  
明治書院

村田陽子(2000)「学習者のあいづちの機能分析：「聞いている」という信号、  
感情・態度の表示、そしてturn-takingに至るまで」『世界の日本語教育』第  
10号

向井千春(1998)「日本語のあいづち－上級日本語話者と日本語母語話者  
によるあいづちの使用」『平成10年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本  
語教育学会

泉子・K・メイナード(1987)「日米会話におけるあいづち表現」『月刊言  
語』11月号

泉子・K・メイナード(1993)『会話分析』くろしお出版

劉 建華(1987)「電話でのアイツチ頻度の中日比較」『月刊言語』11月号

楊晶(2001)「電話会話で使用される中国人学習者の日本語の相づちにつ  
いて－機能に着目した日本人との比較－」『日本語教育111号』

ミンヒョンシク(1997)「国語男女言語の社会言語学特性研究」(『社会言  
語学』第5巻2号、韓国社会言語学会)

高永根(1992)『標準国語文法論』塔出版社

# テープ・レコーダーを利用する国語学習指導

## ーメディアからみた国語教育史2ー

市川真文

### 1

平井昌夫の編著による『国語学習とテープ・レコーダー』（1954年、光風出版）は、国語科教育におけるメディア利用の史的展開の上で、重要な意味を持っている。その構成と執筆者は次のとおりである。

#### I. 国語学習におけるテープ・レコーダーの意義 平井昌夫

1. テープ・レコーダーは国語学習を変化させる
2. 話すことの学習とテープ・レコーダー
3. 聞くことの学習とテープ・レコーダー
4. 読むことの学習とテープ・レコーダー
5. 書くことの学習とテープ・レコーダー
6. 教師の調査研究とテープ・レコーダー

#### II. テープ・レコーダーの取りあつかいかた 寺島愛

1. はじめに
2. テープ・レコーダーの構造と原理について
3. テープ・レコーダーの取りあつかい上の注意について

#### III. テープ・レコーダーを使った国語学習の実例

1. 話すことの学習の実例
  - (1) 話しコトバの学習（1年生）長谷川豊
  - (2) じょうずな話しかたと聞きかた（4年生）小沢方子
  - (3) グループの話し合いの導入（1年生）長谷川豊
  - (4) 劇をしましょう（5年生）浅川静夫
  - (5) 4月の校内放送で（1年生）長谷川豊
  - (6) 話しコトバのしつけ（3年生）山本勇造

## 2. 聞くことの学習の事例

- (1) 音を聞きわけける学習（1年生）手塚千登勢
- (2) 音声を聞きわけける学習（1年生）手塚千登勢
- (3) 正しく聞きとる学習<sup>マ</sup> 手塚千登勢
- (4) 聞きながら大意をとる学習（6年生）手塚千登勢
- (5) 聞きながら要項を筆記する学習（6年生）山本勇造
- (6) 批判しながら聞く学習（5年生）手塚千登勢
- (7) 自分の立場で組織しながら聞く学習（5年生）手塚千登勢

## 3. 読むことの学習の事例

- (1) 普通の音読の技術の練習（1年生）橋本和枝
- (2) 教師の範読を与える（5年生）秋谷茂
- (3) 読書指導にテープ・レコーダーを（4年生）林百合子
- (4) 読めない子どもを読みにさそう（1年生）下沢澄子

## 4. 書くことの学習の事例

- (1) 書取り<sup>マ</sup>の練習（5年生）百瀬澄雄
- (2) 作文の学習指導（5年生）伊藤和雄

## 5. 教師の調査研究に

- (1) 聴力の調査（4年生）山本勇造
- (2) 読字力の調査（3年生）山本勇造
- (3) 話しコトバの診断と治療（1年生）長谷川豊
- (4) 言語能力の実態調査（1年生）長谷川豊
- (5) 読みまちがいの調査（1年生）山本勇造

## IV. テープ・レコーダーの特殊の使用例

1. テープ・レコーダーを使って音読の困難を見わけける方法 寺島愛
2. 特殊学級と読みの治療学級でのテープ・レコーダーの利用 大熊喜代松
3. 読みに自信のない子どもの治療的指導に 大庭忠義

ここからわかるように、Ⅰ、Ⅱの総論とⅢ、Ⅳの各論とからなり、総論ではテープ・レコーダーを利用する国語科学習指導のあり方を説いて、授業改革の可能性、テープ・レコーダー利用の方向性、機器としてのテープ・レコー

ダーの特性をあきらかにし、各論においては、国語科学習指導の4領域と教材研究、授業研究における利用のあり方、および言語の治療的教育領域でのテープ・レコーダー活用の事例が示されている。また、執筆者のうち平井と寺島が国立国語研究所の所員で、他はみな小学校の教員であって、理論的な探究とともに、実践研究にも十分な目配りがされていたのである。

「Ⅰ. 国語学習におけるテープ・レコーダーの意義」で、テープ・レコーダーは国語学習での利用範囲が広いことを指摘し、その利用場面を以下のよう

1 国語学習指導の能率化のために

- (1) 学習活動の指示を与えるために
- (2) 教師の助手の代わりに
- (3) 音の貯蔵に
- (4) ラジオ番組の録音に
- (5) 話の保存に

2 話すことの学習

- (1) 声や発音の練習に
- (2) アクセントやイントネーションの練習に
- (3) コトバのなまりの訂正
- (4) コトバのしつけに
- (5) 共通語の学習に
- (6) 日常生活での話しかたの学習に
- (7) あらたまった話しかたの学習に
- (8) 話し合いの学習に
- (9) 会議の進めかたの学習に
- (10) 劇のセリフの練習に
- (11) 校内放送の練習に
- (12) 紙芝居やスライドの解説と伴奏に

3 聞くことの学習に

- (1) 音を聞きわける学習に

- (2) 音声を聞きわける学習に
  - (3) 正しく聞きとる学習に
  - (4) 聞きながら大意をとる学習に
  - (5) 批判しながら聞く学習に
  - (6) 自分の立場で組織しながら聞く学習に
- 4 読むことの学習
- (1) 音読の練習に
  - (2) 教師が範読を与えるために
  - (3) 読書指導のために
  - (4) 読めない子どもを読みにさそうために
- 5 書くことの学習
- (1) 書き取りの練習に
  - (2) 作文の学習に
- 6 教師の調査研究に
- (1) 聴力の検査に
  - (2) 読字力の調査に
  - (3) 話しコトバの実態調査に
  - (4) 国語学習の診断のために
  - (5) 読みまちがいの調査に
  - (6) 面接や個人調査の記録保存に

学習指導場面のみならず、授業改革の手だてとして、また国語科教育の基礎研究にも考察が及んでいる。学習指導場面でも、話すこと、聞くことに力が置かれているのは、テープ・レコーダーという機器の特性からいって、当然のことであるが、読むこと、書くことでも十分に活用しようとしている。テープ・レコーダーという新しい機器によせる期待とそれを国語科の教育メディアとして位置づけようとする志向が、利用場면을積極的に求めていった結果とみることができよう。

広範な利用場面の開拓を可能にしているのは、テープ・レコーダーの録音、保存、再生の機能を的確に認識しているからである。そして国語学習におい

て音声を録音あるいは再生することが有効な場面を検討したからである。テープ・レコーダーすなわち話すことの学習での利用と短絡しない点に、平井らの研究から学ぶものがある。テープ・レコーダーの機能をもとに国語科教育の場면을再検討した、いうならばテープ・レコーダーというメディアによって国語学習場面の再構築を企てたとみることができる。また、事実『国語学習とテープ・レコーダー』にはそれまで指導が困難であった領域や新しい観点による国語学習が盛り込まれている。この点において、機器の性能の古さによる制約などはあるものの、注目すべき研究である。

## 2

「Ⅲ テープ・レコーダーを使った国語学習の実例」は4領域の学習場面によって、実践研究を整理している。

「1. 話すことの学習の実例」では、多彩な学習場面での利用が模索されている。長谷川の「話しことばの学習」では、話しかたの基礎学習として、毎日の話し合いの録音をもとに児童らが自らの話しことばの生活を検討し自覚する学習をおこなっている。客観的にとらえることが難しい自分自身の話しかたや態度を、テープ・レコーダーを使うことでしっかりと認識させることができている。

「じょうずな話しかたと聞きかた」で小沢は、学習の目標を、話すこと、聞くことの生活について反省しその重要性に気づかせ「言語の音声的な効果についての批判力をのばすこと、また「効果的な聞きかたの根本」を理解し「人の話を聞いて重要なところをメモすることができる」ことにおき、「1. 話の内容をつかむ練習」「2. 順序だてて話す練習」「3. 身近な話をまとめる練習」「4. 一つの課題について感想発表をする練習」「5. メモを取る練習」の学習場面を設定している。「3. 身近な話をまとめる練習」では、一人ずつ身近な話題で話し録音をとり、それを聞き返して話の推敲をおこなっている。また、はじめ、2回目、3回目と録音を聞かせることで、自身の話しかたの工夫に対する自覚を促している。

「グループの話し合いの導入」では、討議の学習の導入として、話し手の交

代の練習と話し合いへの興味付けをおこなっている。グループ単位でおもしろい話題を選び、一人ずつ順に話して続き話をする活動を録音し聞かせている。「ことばの練習として相当効果があ」ったと述べている。

浅川の「劇をしましょう」は、日常生活の劇化や演技力、演劇の鑑賞批評力の育成を目標としている。セリフの読み合わせを録音し検討する学習を繰り返す中で、「自己評価する場合に客観性がでて」き、「子どもが自分の声、読み、話し合いなどに対する態度が変わると共に、興味と関係を持つ」ようになった。さらに日常の会話でも、相手の立場を考えて話す態度が育ったという。

「4月の校内放送で」は、国語と音楽の学習を総合した放送劇の練習にテープ・レコーダーを利用している。練習の能率を高め話しかたの技術に目を向けさせるには、「自分の声を自分で聞く、今話したことをすぐ聞く、自分で考える」ことが指導者の助言より有効であろうという見通しによる。その結果「話しかたの技術の能力を、のばしていくことができ」たが、「話す内容については全然効果が」なく、「内容についての反省の機会を与えるテープ・レコーダーの使用が考えられなければ」ならないとしている。

「話しコトバのしつけ」で山本は、休み時間の子どもたちの自由な会話を録音し教材として「自分たちのコトバに対して自覚と反省を持たせるため」の授業をおこなった。「単に観念的によいコトバを使いましょうというような申し合わせだけではなかなか効果をおさめにくい」題材を「なまのコトバをテープ・レコーダーに再生してやること」で「話しコトバの実体について反省すべきものを感じと」らせることができたと述べている。

「2. 聞くことの学習の実例」では、なかなか指導しにくい聞くことの学習をテープ・レコーダーを利用することで意欲的に開拓している。「音聞きわけの学習」で手塚は、ユニークな授業を構想している。教科書の教材「なきごえ」（二葉「こくごのほん1年中」）に取り上げられている動物の鳴き声を録音し、発展学習の教材にし、さらに楽器や話し声など子どもたちが興味を持ったものを録音してそれぞれの音聞きわけの学習をおこなっている。「耳の聞きわけの能力の基礎的訓練」であり、テープ・レコーダーの特

性を生かした実践である。

「音声聞きわけの学習」も聞きわけの能力の基礎的訓練であって、範読や子どもたちの音読を録音し比較することで、発音やアクセントなど音声言語自体への認識を深め、「自分のそれを自覚させる意味においても」有用であるとまとめている。

「正しく聞きとる学習」では、正しく聞きとったときに一定の行動がとれるような指示文や説明文の音読を録音し、正確に聞きとる練習をしている。テープ・レコーダーを使用しているのは、「同じ調子で発問が繰り返されることとその間教師は常に子どもの動きをこまかく観察してメモすることができ」るからである。

「聞きながら大意をとる学習」でも、教材の録音を繰り返し聞かせる中でメモを取り、それを整理して大意をとらせる練習をしているが、ここでも同一の教材を繰り返し提示できる点と教師が子どもたちを丁寧に見てまわることができる点にテープレコーダ利用の利点を認めている。

山本の「聞きながら要項を筆記する学習」は、「聞く態度、書く姿勢、鉛筆やペンの持ちかた、字の大きさや形、誤り、要項の内容」に対し最も効果が上がるよう「その場に即した的確な指導」をひとりひとりにするため、教材提示はテープ・レコーダーを使用し、教師は子どもたちの個別指導に徹底することができるようにしている。聞きながら書くという活動はなかなか難しく、「これに対する指導はよほど考えてかからなければ効果をおさめることはできない。テープ・レコーダーはこういう場合に、受持教師の良き助手として利用されるであろう。」と述べている。

手塚は「批判しながら聞く学習」で、録音した子どもの朗読を教材にし、くり返して聞きながら、「じょうずな言いまわし、美しいコトバ」「もうちょっとなおしたいコトバ」に目を向けさせつつ内容理解の学習をおこなっている。読むことの学習での読みなおしに相当する活動でテープ・レコーダーを使用し、何度も聞きなおして内容理解や鑑賞を深めている。話しことばでの鑑賞批評の授業を構想しているのである。

「自分の立場で組織しながら聞く学習」では、長文の教材を録音し、「何



の目的で聞くのかをはっきりつかませるような」問題を印刷して配布し、これを聞く手引きとしながら、メモを取りつつ聞かせている。2度聞かせ、内容の把握をもとに各自の意見感想をまとめさせて、討論に移行する。討論も録音し、それをもとに子どもたちなりの提案をおこなうように学習を進めている。

「3. 読むことの学習の実例」では、音読での利用以外にも有効な学習場面を求めている。「普通の音読の技術の練習」で橋本は、児童が自分の読みを意識化する手だてとしてテープ・レコーダーを利用し、声量や速さ、拾い読みやことばの加除に対する指導をおこない、「テープ・レコーダーを使用することによって、お互いに注意しながら楽しく、正確に音読の学習ができるようになった。」と述べている。

秋谷は「教師の範読を与える」で、範読を録音して使用することの効果について、範読を聞く子どもたちの丁寧な観察ができること、音読指導の個別化に活用できることをあげている。子どもたちにテープ・レコーダーを操作させ範読を学習資料として自在に利用できるようにし、その結果「再生される範読にちょうしを合わせて読んでみるというようなくふうをする子もあらわれて」きたのである。

「読書指導にテープ・レコーダーを」で林は、音読の技術に対してではなく、読後感の内容を検討し深めていく過程でテープ・レコーダーを使用している。断片的な読後感の発表を録音し再生しつつ話し合うなかで「感想の断行にすぎなかったことがお互いの話し合いによって、さまざまな考え方に発展し、批判され、うつりかわって」いき「話し合いの再生を静かにきいた後、書かれた2度目の読後感<sup>ミ</sup>は、読後感としての深まりを持ち、文章としての形もとのつてきた」と述べている。

「読めない子どもを読みにさそう」で下沢は、なかなか読もうとせず、また音読の能力も低い子どもに、読むことへの動機付けをおこなおうとしてテープ・レコーダーを利用している。人前で本を読んだことのない子どもが、目新しい機器に興味をいだき、たどたどしくとも友達の音読が再生されるのを聞いて、読む意欲をかき立てられた。録音するというそれまでにない読む

場の中で一所懸命に音読をし「初めはつかえながら読んでいた子どもたちが、家に帰って一生懸命に練習し、『また録音をとってね』とねだる」ようになった。テープ・レコーダーによる新しい経験が、言語活動の意欲を高めたのである。

「4. 書くことの学習の実例」では、作文学習の着実な指導のためにテープ・レコーダーを用いている。「書取りの練習」は、聴写の学習効果を高めようとした実践である。作文の基礎的能力としての書字や表現語彙の指導を聴写によっておこなう場合、「そうすると困るのは、評価をすべて事後に行わねばならないことで、また、いちばんだいじな、その場での指導がまったくできない」と百瀬は指摘している。そこでテープ・レコーダーを利用することで、「文字の正誤はもちろん、筆順、姿勢から、鉛筆の持ちかたまで良く観察評価し、その場で指導」できるようになり、その結果「子どもたちが、書く速さをのばすことの必要を考えるようになったこと、漢字の字形などだけでなく、コトバや文を正しく書こうとする態度が身についてきたことなど、すでにかなりははっきりした効果が出ている。」と述べている。

伊藤の「作文の学習指導」では、共同批正の段階でテープ・レコーダーを利用している。「卒業生を送る言葉」として、児童がそれぞれに書き上げた作文を発表し、録音したものをもとに、共同批正の授業が始まる。ある発表に対して「思い出がもう少しあったほうがよいと思います。」という意見が出されると、「では、もう一度録音を聞いてみます。思い出にあたる所をさがしてください。」と司会役の児童が指示し、録音を聞きなおして卒業生との思いでの内容をふくらませていく。題材の段階だけでなく、構成を考える上でも録音を何度か聞くことで、共同してよりよい作文に仕上げている。

### 3

以上のように、4領域のそれぞれでテープ・レコーダーを有効に活用できる場面を求めて実践研究が行われた。これらを、学習指導の機能からとらえなおしてみると、テープ・レコーダーの利用場面は次のようになろう。

まず、教材開発の機能がある。教材は反復して利用できることが望ましい

が、音声言語は現れては消えてしまい、この点に教材化の難しさがある。しかも、音声言語は言語生活に密着しており、音声言語の指導がそのまま日常の言語生活の指導につながるものであり、この点からいえば、学習者の言語生活自体を教材としたいのである。このところにテープ・レコーダーが有効に働く場面を見いだしたのが、長谷川の「話しコトバの学習」や小沢「じょうずな話しかたと聞きかた」、山本の「話しコトバのしつけ」などであるだろう。これらは、児童の普段の話しことばをそのまま録音したものを教材とすることで、子どもたちが自分のことばに目を向けることを可能にしている。また、手塚の「音を聞きわける学習」のようなそれまでにない教材を作り出すことも試みられている。

教材提示の機能をテープ・レコーダーにゆだね、教師は個々の学習者の指導に専念できるような授業の構造化を図った実践もある。山本の「聞きながら要項を筆記する学習」、百瀬の「書取の練習」などがこれにあたる。授業過程で教師の複数の指導機能が並行する場合、これをいかに機能分担するかという点に授業運営の工夫が求められる。テープ・レコーダーを用いて機能分担をはかるということは、従来、教師の学習指導場面における指導スキルに求められていた事柄が、メディアを利用することにより授業設計の問題として取り扱うことができるようになったということである。

また、文章教材は何度でも繰り返して提示することができるし、提示するごとに表現に差異が生じるということもない。音声言語ではこのようなわけにいかない。そこに音声言語教材の独自性を認め、一回性に徹底した学習が構想されることになる。しかし、一定の統制された表現の音声言語教材を必要とする場合もある。とくに、同じ教材を何度も提示したい場合、あるいは個々の学習者の必要に応じて提示したい場合にテープ・レコーダーが有効であることを、手塚「正しく聞きとる学習」や秋谷「教師の範読を与える」などの実践は示している。

学習活動の記録が可能になることで、子どもたちの学習が着実なものになっている。加えて、いくつかの学習指導機能が充実することになった。林の「読書指導にテープ・レコーダーを」や伊藤の「作文の学習指導」は、話

し合い学習を録音し、必要に応じて聞き返すことで、話し合いを深めていくことができている。話し合いは時間に沿って展開していくわけで、話し合いの中で話し合いを振り返り学習課題を探ることは容易なことではない。録音するということは、話し合いに個別参照性を持ち込むことであって、自らの学習をふり返りつつその中に学習内容を発見するという学習が可能になっている。子どもたちの学習が新たな教材を生み出していることになる。これもまた教材開発の機能とみることができよう。

さらに、評価機能の充実がある。音声言語は学習の過程をふり返りにくい領域であるから、評価の点で困難さがつきまとう。とくに、自己評価は難しい。しかし録音を手がかりとすることで、手塚「音声を聞きわける学習」、浅川「劇をしましょう」、橋本「普通の音読の技術の練習」にみられるように客観的で詳細な自己評価、相互評価が可能になっている。これら以外の実践でも、自らのことばに目を向けるようになった子供たちが、学習場面でなくとも言語活動や言語生活を自覚的にとらえる傾向がでてきたことを述べている。これは学習の自己評価が、広くことばそのものを評価する観点を用意し、自律的な言語生活者を育てていく可能性を秘めていることを示すものだろう。

また、教材化と自己評価の機能が連携することで、練習学習が効果的なものになった。練習学習は反復を基本とするが、練習への興味や意欲を持続することができにくい。しかし、自分の練習の過程をしっかりと見すえて練習の課題を持つことができれば、練習学習も単調な練習のための練習に終始することはなくなる。とくに、録音を活用することは、練習の結果をすぐにその場で確認することができ、したがって、次の練習の目当てを持つことができる。浅川「劇をしましょう」や長谷川「4月の校内放送で」はその典型といつてよいだろう。

動機付けの機能においても、テープ・レコーダーは効果を上げている。下沢の「読めない子どもを読みにさそう」では、子どもたちが持っている機械に対しての興味を生かして、テープ・レコーダーを導入し、録音することで音読への意欲を喚起している。長谷川の「グループの話し合いの導入」でも、

続き話を録音するという活動が、話し合いの機構への関心を生んでいる。これら以外の実践でも、録音をする、録音を聞くという活動が、子どもたちを学習に集中させている。テープ・レコーダーが、子どもたちに、それまで経験したことのない録音という言語活動をもたらしたのであり、その新しい経験への興味が子どもたちの学習への動機付けになっているのである。ここに、新しいメディアが持つ価値、すなわち新しい経験の創出がある。

新しい言語活動の経験が成立するということは、新しい学習内容が生まれるということである。この点からみて、手塚の「聞きながら大意をとる学習」や「批判しながら聞く学習」、「自分の立場で組織しながら聞く学習」は、読解に対する聴解の学習領域をかためるものといえる。聴解は一度聞いて分かることが目標であるが、これは読解の場合とて同じである。しかし、読解指導では繰り返し表現を探り読み深めていくことで読解能力の育成を目指している。このことが聴解においては指導できなかった。だが、手塚は録音を活用し、聞く手引き・理解の手引きとなる問題を考えることで聞き深める指導をおこなっている。これは、リーディング・クエスチョンを用いた読解指導に相当するといえよう。

以上のように、『国語学習とテープ・レコーダー』は、国語科の学習を能率的・実証的におこなおうとして実践研究を展開していた。その成果は豊かなものであった。さらにその中にも、新しい、あるいはそれまでに言及されてはいても指導が困難であった学習内容を切り開いていく姿勢がみられていて、メディアによる授業革新の先駆的研究という位置づけができよう。したがって、後年、平井が『国語学習指導事典』（1974年、ぎょうせい）を著した際に、「国語の学習指導における教具」にテープ・レコーダーの項を設けたが、その概要が『国語学習とテープ・レコーダー』に拠っていたことは当然といえるだろう。こうした点で、本書は国語科教育メディア史の上で見のがせない研究である。

2002年12月8日 印刷  
2002年12月15日 発行

編 集 者

武庫川女子大学  
言語文化研究所

発 行 者

武庫川女子大学  
西宮市池開町6番46号

(非 売 品)

印 刷 所

大和出版印刷株式会社  
神戸市東灘区向洋町東2-7-2

**MUKOGAWA WOMEN'S UNIVERSITY**  
**ANNUAL REPORT**  
**OF**  
**RESEARCH INSTITUTE FOR LINGUISTIC**  
**CULTURAL STUDIES**

**Vol. 13**

**FEB, 2003**

---

**Contents**

- The word written in katakana used for the newspaper readers' column  
Hideo Satake
- The characteristics of a loanword to express about the clothes  
Chiaki Kishimoto
- The contrast research of the nod of the man and woman  
in Japan and Korea  
Kang Changim
- Japanese learning guidance which a taperecorder is used for  
Masafumi Ichikawa